

## 中国近代仏学の振興者——楊文会

坂元ひろ子（訳）

樓宇烈

〔訳者まえがき〕

本稿著者の北京大学哲学系教授、樓宇烈氏は一九三四年生れで、越劇発祥の地として知られる浙江省嵊県を原籍とし、上海で育たれたが、北京大学入学以後は、もっぱら北京大学に在籍されている。一九六〇年、北京大学哲学系卒業と同時の助教（助手）職をぶりだしに、一九七九年に講師、一九八〇年に副教授、一九八五年、哲学系の東方哲学史教研室新設に伴い、中国哲学史教研室から初代主任として移つて教授となられた。国内外で中国を代表する中国哲学の中堅研究者と目されている。

樓氏の研究は、本稿末尾に附した主要編著・論文目録でも明らかなように、魏晋南北朝から近代までに及び、最近は現代哲学者の熊十力の研究も発表されている（八五年十二月の「紀念一月十八日」）。近年、ようやく注目されるようになった、中国

熊十力先生誕生一百周年学術討論会の席上）。こうした学术面での業績は、日本でも高い評価を受け、また日本からの留学生・訪中学者に対する氏の学術面等での真摯かつ心細やかな援助によって、その人徳を慕う人も多い。かくいう訳者も北京大学哲学系での留学中、指導教官であった樓先生から熏陶を受け、並なみならぬお世話を一人である（拙文「中国の「老師」を想う」——『日中經濟協会報』一四一号所収——でもこのことは記した）。

本稿は樓氏が一九八五年十一月に学術交流で訪日されたおりに準備してこられたもので、その概要是日中仏教学術會議で講演され、それの要約が『中外日報』に掲載されている（同年十一月十八日）。近年、ようやく注目されるようになった、中国

近代における仏学の役割という重要な問題について、「仏学と近代中國哲学」(その概要を東京大学で講演、また「近代仏学的特點及其評價」として『文史哲』八六年一期に發表)をいわば総論とし、各論として本稿では清末仏学の中心、中國近現代仏學の祖ともいふべき楊文会を扱う。内外を問はず、楊文会の思想にまでたちいた研究はまことに寥寥たるもので、日本でも近くは、手前味噌のようだが、拙稿「中國近代思想の一断面」譚嗣同の以太(エーテル)論一(『思想』七〇六号)が主に本稿でも言及のある清末の変革思想家、譚嗣同との思想的関連で論及しているぐらいのものである。樓氏のこの楊文会の專論は、今後も楊文会、ひいては中国近代仏学研究の嚆矢として学術的価値を失うことはないだろう。

楊文会の著作のほとんどは執筆年未詳であるため、その思想の軌跡を辿り難く、研究は容易ではない。そうした困難をものゝ越え、本稿では楊文会思想全体の要処を見事におさえ、それの実証的研究に成功している。なかでも、淨土思想への楊文会の独創的見解を解明した点は高く評価せられるべきであろう。

あらかじめ概要を示しておくと、楊文会の刻経事業や人材養成、日中仏学交流面での功績を明らかにした上で、その仏学の特色が詳らかにされる。まず学理面では、仏理を最高とした儒道、とりわけ道家との融合傾向、華嚴の賢首の教理を繼承しながら、『大乘起信論』を中心にして大乗各宗派を融合する馬鳴宗の建立構想。応機説法の重視によって、頓悟の禪を尊びつゝも根器を選ばない淨土門の広さを評価し、禪淨を華嚴の円融無

礙の理の導入で融合する立場。さらに実践面では、観想・持名の兼修を重視するがための念佛と称名との区別、經論研鑽の重視、自力・他力双方の重視という基調。そうした立場からの淨土宗や日本淨土真宗に対する批判。これらの点およびその意義について、仏教思想史をふまえつつ具体的に指摘している。

うかがったところでは、樓氏はもともと近代哲学研究を目指し、そこに仏教の重要な役割を見出したため、魏晉南北朝思想研究に入られたとのこと。本稿は前述の「仏学と近代中國哲学」同様、その結果というべきで、近代仏学をなかなか視野に入れられない日本の中国仏学なし近代思想の研究に対する強い刺激となりうるだろう。

そうした高い価値をもつ論文ではあるが、翻訳にはなかなか骨が折れた。実証的ということもあり、楊文会の原文が大量に引かれ、しかもそれが古漢文の文体に近い原文のまま現代文の地の文へ織り込まれている。それらがあやなす中国文ならではの独特な文体は、邦文の論文風に筋を通すのが難しく、とても原文の風格、リズムを伝えられなかつたのを残念に思う。原則として現代日本語訳した引用文の解釈に関して、気になつた個所は樓氏に問い合わせたが、責はもちろんすべて訳者が負うものである。訳者は仏学専攻ではないので、いろいろ不備があるかと思い、専門家の御指正を仰ぐ次第である。

なお、文中、( )は樓氏の註、「」は訳者の註を示す(本文外の註を示す数字も同様)。

楊文会(一八三七—一九一一)は字を仁山といい、安徽省石埭(今の石臺)の人である。官僚の家庭出身であったが、幼少期から科學の勉強をきらい、奇書を好み、任俠的氣質・ふるまいがあった。十七歳の時(一八五三年)、太平天国の起義軍が安徽に進攻したため、家人について安徽・江西・浙江・江蘇省の各地を転々とすること十年、一八六四年、二十八歳の時に父親の葬事をとりはからうため帰郷したが、不幸にも伝染病にかかり、大病を患つた。療養中に『大乘起信論』を何度も精読し、その内容に納得するところがあり、そこで仏教經典研究を始めた。

問もなくさらに『楞嚴經』を読んでから仏学により興味をもつようになり、そのため「仏学に専念し、從來學ん

近代の一思潮を形成した。

仏学が近代においてあらためて振興した原因は多岐にわたる。たとえば、伝統的な儒家の理学思想が打撃を蒙ったのち、思想上の空白を埋めるものとして仏学が着目されたこと。また、西洋學術思想の流入につれ、当時の西洋學者が仏教研究に興味を抱いたという背景、等等があるが、なかでも、楊文会居士が仏学奨励に一生尽力したことをおいては語りえないものである。梁啟超は『清代學術概論』のなかで、「清末のいわゆる新学家は、ほとんど誰ひとりとして仏教と関係をもたなかつたものはなく、眞の信仰者はおおむね楊文会に歸依した」と述べ

だことはすべて廃棄した」(『楊仁山居士事略』<sup>[1]</sup>)。

一八六六年、江寧「南京附近」の土木工事に従事するため南京に移転、そこで王梅叔・魏剛己・曹鏡初らの仏学同好の士を得て、常に仏学を切磋琢磨した。彼らは、仏教典籍の散佚や経版の破損が仏教弘揚のうえで大問題であるという感を同じくし、広範な布教のために仏教典籍を刊行しよう、と決意した。そこで楊文会みずから刻経規約の草案を作成、同志十余人を集め、それぞれが手分けして刻経のために寄付金を募るとともに、金陵刻経處を創設した。時を同じくして楊文会の刻経事業を支援したりそれに呼応したりしたもので目立ったところでは、揚州「江蘇省」に揚州藏經院(江北刻経處)を創設した鄭學川(のちに出家、法名は妙空)、また長沙「湖南省」に長沙刻経處を創設した曹鏡初らがいた。これらの刻経處は金陵刻経處を中心にして刻経版式および校訂・編集様式、凡例を統一し、協力して分業をおこなつたのである。

楊文会は金陵刻経處の刻経事業を五十年近くにわたって主宰した。大蔵經の校勘・刊行、初心者のための大蔵輯要<sup>(6)</sup>の編纂、それに藏経外の重要な佚書の編纂などをも

纂・刊行したり、魏源編の『淨土四經』などを重刻したりした。

楊文会が主編・刊行した經論典籍の大部分にはかなり精密な選択・校勘・句読符号つけなどが施しており、しかも宋元以降、中国では所伝を失つた多くの重要な著作を含んでいるので、金陵刻経處(江北刻経處・長沙刻経處等を含む)が刊行した書籍・仏典は中国近代における重要な仏典の版本となつており、かなり高い学术的価値をもつ。のみならず、流通しやすかつたため影響が広くゆきわたり、近代仏学の振興に重要な役割を果したのである。

楊文会は仏学の人材養成面でも大いに心血を注いだ。

まず金陵刻経處を基地とし、居士道場を設け、ほうぼうの仏学者と仏学を研鑽した。楊文会の有名な弟子、黎端甫・桂伯華・譚嗣同らはみなこのようにして仏学を学んだのである。「秩氏の徒は學術を身につけることなく、固陋に安んじている」と、当時の国内の状況に楊文会はたいへん不満で、仏教振興のためには「學堂開設から始めるべきだと考え(「般若波羅密多会演說四」、『雜錄』卷一)、「べきだと考へ(「般若波羅密多会演說四」、『雜錄』卷一)、

計画していたが、さまざま困難に遭い、ついにその宏願の全面的な実現には至らなかつた。それでも三千巻余り、数百種もの著作を刊行しており、これだけでも大きな功績とすべきである。その主要なものあげると、華嚴宗関係では、とりわけ賢首・法藏の著作を収集・整理、校訂・編纂し、華嚴宗思想研究のために基本的かつ系統的な資料を提供した。法相宗の著述面では、久しく所伝を失つていた窓基の『成唯識論述記』等の多くの重要な著作を刊行し<sup>(9)</sup>、当時の学術界に強い関心をまき起し、近代唯識法相学研究の振興を促した。さらに、楊文会は『大乘起信論』を読んでから入信したため、同書をいたく重んじ、「馬鳴大士撰の『起信論』は宗教全般に通じていて、初心者の手引きとなる。この内容を理解しないれば經中の奥義に到達するすべはない」(「起信論真妄生滅法相圖跋」、『等不等觀雜錄』卷三一以下、「雜錄」と略称)とみなし、そのため『大乘起信論疏解彙集』を編纂、刊行した<sup>(10)</sup>。また一生、「教理は賢首の教えに依り、修行面では弥陀に依つた」のであり、淨土の著述の刊行をもたいそう重視し、『淨土經論十四種』・『古逸淨土十書』<sup>(11)</sup>を編

みずから「秩氏學堂内班課程」計画を作り<sup>(12)</sup>、「小・中・大學の例にならつて、天下の僧尼ひとりに如來教法を研鑽させることができる」、と主張した。その課程の規定によれば、三年間学んで沙弥戒を受け、さらに三年で比丘戒を受け、またさらに三年で菩薩戒を受けてからはじめて「方丈となり、開堂して説法し、高座に請われて經典を講じ、戒壇に登つて戒法を伝授することができる」、そうしてこそ大和尚と称することができる」(「秩氏學堂内班課程芻議」、『雜錄』卷一)。

一八九五年、楊文会はスリランカの達磨波羅の手紙を受けとつた。大善提会を創立し、インドを行つて仏法を復興させたいので、中国からも学僧を派遣するよう要請したので、楊文会はこれに全面的に賛同し、それ以降、仏教学校開設を心がけ、人材養成を急務とみなすようになった。楊文会みずから『仏教初學課本』を編集・執筆するとともに、日本の學僧南条文雄に手紙で依頼し、「参考にするため、佛教各宗の小学校から大学までのさまざま学則」を日本からとり寄せた(「与日本南条文雄書二七」、『雜錄』卷八)。だがこれはたいへん手間どり、一九

○八年になつてようやくその願いは実現し、金陵刻経處に「祇桓精舎」が開設された。<sup>(14)</sup> ゆくゆくはインドに行って仏教を振興することができるようになると、学生には仏学以外に漢語・西洋語ともに通ずることを課した。楊文会自身が仏学の講師となり、漢文教師として李曉駿、英語とサンスクリットの教師として蘇曼殊を招いた。<sup>(15)</sup> 入学した学生は僧俗合せて約二十名、釈太虛は当時の学僧のひとりであった。

残念ながら経費不足で、「祇桓精舎」はわずか二年で閉舎を余儀なくされた。だが楊文会の呼びかけで一九〇年、仏学研究会が組織され、楊文会みずから主任講師となり、毎月一度、会を開き、毎週一度、仏經を講じた。この時、正式に楊文会に師事した歐陽漸は、楊文会の死後、金陵刻経處の運営を託され、それ以降、著名な「支那内学院」を開設し、やはり近代中国に多くの仏学研究の人材を生みだした。<sup>(16)(17)</sup> 時期的に前後して、楊文会門下の著名な仏教学者には、さきにあげた以外に、さらに梅擴芸・蒯若木・李証剛・孫少侯・邱曉明らがいる。このことからもわかるように、近代の僧・俗仏教の人材の輩出

は、楊文会の人材養成の努力ときり離しては考えられない。梁啓超・章炳麟・沈曾植・陳三立・夏曾佑・宋恕・汪康年といった近代の有名な政治活動家・思想家・学者にしても、多かれ少なかれ、みな楊文会の仏学の影響を受けていたのである。

楊文会は中国近代の仏学の振興者であるとともに、近代中日仏教文化交流の開拓者でもあった。一八七八年（光緒四年）、楊文会は曾紀沢「曾國藩の長子」の隨行員としてヨーロッパに派遣され、英・仏等の政治・文化・商業などを視察した。この時、ちょうどビロンドンのオックスフォード大学に留学していた日本の浄土真宗の学僧、南条文雄と知り合い、その後、三十年余りにわたって絶えず文通し、学問を切磋した。楊文会は南条文雄の協力を得て、日本・朝鮮などから中国には五代以降、伝を失っていた重要な經論注疏や著述を約三百種手に入れ、つぎつぎと選刊し、広く流通させた。そのなかには、華嚴宗の法藏、法相宗の窺基、淨土宗の善導らの多くの重要な著述も含まれていた。

一方、日本の京都の蔵經書院が『統藏經』刊行を計画した時には、楊文会もまた大いに協力した。『統藏經』目録草案に削増の建議をし、かつ手を尽して善本秘籍を探し出し、編者の採録に供した。楊文会は『日本統藏經叙』においてこの事業を絶讚し、「これは六朝唐宋の遺書を收めており、紫柏〔名は真可、字は達觀、明代に活躍した學僧〕も目にすることのできなかつたものである。まことに世の偉業と言うべきで、隋唐の不足を補うに足りる」とみなし、さらに「私もまた収集のお手伝いをし、その完成を楽しみにしてきた」と述べている。

これについては、日本の『統藏經』編纂主任の中野達慧が『大日本統藏編纂印行縁起』のなかでこう述べている。「これよりさき、南条博士を介して金陵の仁山楊君に秘籍の搜訪を請い、幾許も無くしてまた浙寧蘆山寺の式定禪師と法門の交りを締び、雁魚〔書信〕を往来する」と幾十回かを知らず、二公みなこの拳を嘉ぶ。あるいはみずから検出し、あるいは人を派わして旁搜し、もつて目録未収の書を集めて寄送されること前後數十次、幸いにして明清両朝の仏典を多く獲た。予は一書を接げる

たび、歎喜頂受すること趙壁を獲たごとくで、礼拝薰誦し、手を仄くに忍ばず」と。南条文雄も序において、「居士、頗る此の拳を隨喜し、藏外および未刊の書を集め、郵送してその材に充てられたこと、あるいは十をもつて数えられよう」、「蔵經書院は毎月いまだかつてその発行の期を誤まない。居士が隨喜してその材料を供給されたためである」と述べている。

このように、金陵刻経處の刻経事業と日本の蔵經書院の『統藏經』編纂とは、それぞれ中日両国の近代仏教史における大事業であり、これら二つの仏教文化史上の大事業において、中日両国の学者は真摯な協力と交流とはかつたのである。このことは永く敬意を払い、發揚するに値する。

学術思想においては、楊文会は儒仏道三家の融通無礙なることを説いた。「近年、門を閉ざして經を窮めようとし、釈迦如來の一代時教についていくらかその經緯を知り、はじめて孔子と顏回の心法は「仏法と」いささかの隔もなく、柱下と漆園「老莊を指す」はともに大権

「仏の権化」を体現したものと信じ」（『与穎惟詩書』）、『雜錄』卷五)、「さらに如來一代時教の根源をつきつめてゆく」とがわれば、黄・老・孔・顔の心法は本来、異なることがわかれり、後儒の浅見にとらわれることはないだらう」（『与沈雪峰書』、『雜錄』卷五）と述べている。とはいへ楊文会は仏理を最高のものとみなしていたのであり、それゆえ、「もし三教を論じるなら、儒道の高いものであつてはじめて仏理と通じることができる」（『代陳栖蓮答黃掇焦書二』）、『雜錄』卷六)とした。それでも、平素は「張氏の学で心を治め、老氏の道で世に處し、人との交りでは退讓を心がけてきた」（『与陳南陔書』、『雜錄』卷五）と、道家をもかなり重んじており、よつて『陰符經』・『老子』・『道德經』・『列子』・『沖虛經』・『莊子』・『南華經』の『堯隱』をそれぞれ著したのである。彼の考えでは、これらの道家の著作は、「実は仏經と表裏しております」（『沖虛經發隱序』）、「文はそれぞれ異なるようにみえるが、義は実は相通する」（『陰符經發隱序』）のである。また、宋の僧延寿が『宋鏡錄』において老莊は通明禪「四禪・四無色・滅尽定」であると判じ、明の僧、憨山德清が老莊は大乘

「いだらう」（『与沈雪峰書』、『雜錄』卷五）と述べている。とはいへ楊文会は仏理を最高のものとみなしていたのであり、それゆえ、「もし三教を論じるなら、儒道の高いものであつてはじめて仏理と通じることができる」（『代陳栖蓮答

黄掇焦書二』）、『雜錄』卷六)とした。それでも、平素は「張氏の学で心を治め、老氏の道で世に處し、人との交りでは退讓を心がけてきた」（『与陳南陔書』、『雜錄』卷五）と、道家をもかなり重んじており、よつて『陰符經』・『老子』・『道德經』・『列子』・『沖虛經』・『莊子』・『南華經』の『堯隱』をそれぞれ著したのである。彼の考えでは、これらの道家の著作は、「実は仏經と表裏しております」（『沖虛經發隱序』）、「文はそれぞれ異なるようにみえるが、義は実は相通する」（『陰符經發隱序』）のである。また、宋の僧延寿が『宋鏡錄』において老莊は通明禪「四禪・四無色・滅尽定」であると判じ、明の僧、憨山德清が老莊は大乘

一等級高いだけで、どのみち上帝の支配界を出ない。しかも、たとえ千万歳まで生きられたとしても、結局は尽きる時がくるのだ、と。それゆえ楊文会は、四十年近く仏学研究をしてきたが、「はじめは釈道を兼学し」、それから「道家を捨てて仏学に専念した。そうして何年かして、ようやく仏法の奥深さは諸教を統括して余すところがないものであることがわかつた」（『与鄭駒齋書』、『雜錄』卷六），と述べているのである。

儒家については、楊文会は孔子と顔回の心法が仏法と融通しうるものだと認めたにすぎない。『論語』の「子曰ワク、吾レ知ルコト有ランヤ、知ルコト無キナリ。鄙夫有リテ我レニ問ウ。空空如タリ。我レ其ノ両端ヲ叩イテ竭クス」（「子罕」）をたいへん高く評価し、この部分は孔子の全体の大用を表していると考えた。仏理によつて以下のように解釈するのである。「知ルコト無シ」とは、般若の真空のことである。情と無情とはすべてこれを体とする。劣機に遇つても、ひたすら本分で接するのである。鄙夫が執着するのは二端のほかなく、それがいわゆる有無・一異・俱不俱・常無常等の法である。孔子がそ

止觀であると判じたのに対し、道家の理がよくわかつてない、とみなし。楊文会の見方によれば、道家の書には「處世」を論ずるものもあれば、出世を論ずるものもある。出世の論には浅いものもあれば深いものもある。浅いものは天乗を出ないし、深いものはそのまま仏界に達している。そこで、老・列・莊の三位はいずれも薩婆若海「仮智」より逆流して現れ、和光混俗して五乗法（原注一人乘・天乘・声聞乘・菩薩乘・仏乗）を説くもので、衆生の機に応じて受益させうるものであることがわかる。後世の解釈者は一門に限定され、ついに三大士の奥義を極めることができなかつた」（『南華經發隱序』）のである。これは道家の老・莊・列子を仏理と同一視したものだといえる。もちろん、それは融通の面から述べたことであつて、差別面についていえば、道家は長生を求めるので「長命維持の功を第一」とする」が、仏家の方は「ひたすら命根の断たれるのを待ち、命根が断たれれば当下に無生となつて、死ということなどあらうか」という立場だということになる。すなわち、仏法は生死を超越しようとするが、道家は仙人になることを願い、ただ人界より

の二端を叩いてそういう妄知を滅尽してしまうと、鄙夫は当体に空を体得し、孔子の「無知」と異なるところがなくなる」（『論語發隱』）。また、「真知とは無知にしてすべてを知ることであり、達磨が梁の武帝に『不識』と答えたのは、真現量「諸存在を分別心なく、そのままに量知する」を顯示したものである。また孔子が『吾レ知ルコト有ランヤ、知ルコト無キナリ』と述べたのは、開迹顕本「歴史的人物としての釈尊は垂迹(仮)の身だと明かし、この身は久遠実成の本仏だと頗わしたこと」（『法華經』）を意味する。この境地にまで達すれば、儒仏は源が同じで、論争は止んでしまう」（『答釈德高質疑十八問』、『雜錄』卷四），と。さらに「克己復礼」「論語」「顏淵」にも完全に仏学による解釈を施している。

孟子については、楊文会はしばしば暗に批判した。「孟子が孔聖の深遠なる境地に達していなかつたのは、書中に歴然としている。宋儒が四書を並び用いたので、俗士には見わけがつかなくなつてしまつた」（『与黎端甫書』、『雜錄』卷八），また「孟子は我執が破れず、孔子・顔回とはなお二重の隔りがあつた」（『評方植之向巣微言』、『雜錄』

卷四) のだ、と。そこで楊文会としては「もし孟子をまともに批評しようものなら、世間からなおさら非難されるので、人に話すだけで、それを文章にはしなかった」

(「与桂伯華書」)、「雜錄」卷六) のだが、のちにやはり『孟子發微』を著し、孟子の性善説を多々批判した。たとえば、「孟子の全般的主張は仁義であり、性善であつて、その意図はたいへん結構だが、道を悟りきつていらない」し、

孟子は「赤子の心を至善としたが、赤子はまさに無明の窟宅のうちにいることがわかつていない」のであり、孟子は「これ「赤子の心」をそのまま純全の徳とみなした。それゆえ、その性善説は本源を透見することができなかつたのであらう」(『孟子發微』)、と。

宋明理学となると、楊文会はいつそ批判する。「宋儒の性理の学はそれで一派を成しており、孔子の一貫といふ主旨「吾が道ハモツテ之レヲ貴ク」(『論語』「里仁」)とは異なる」のであり、よって宋儒の性理学は仏理とはなおさら相通ずるところがない、とみなしたのである。楊文会からすれば、宋儒の「いわゆる窮理とは、まさに執取相「苦樂等の境に執着すること」と計名字相「所執

その意図を推測するに、どれもこれも理学家を引いて心宗を究明しようとしているようだ。しかし理学家は程朱に依拠しているものである以上、そうしたことができるとはとても信じられない。汪君のこの程朱引用の考證は、儒者に信心を起させることができないどころか、逆に禅宗は程朱・心学以上のものではないと見くびらせてしまうことになる。……将来この伝を重刻する時には、評語のうち儒家に牽強附会している部分を削除してもらいたい。それは護法の一端となるはずだ」(『雜錄』卷三)、と。

総じて、楊文会は儒教にあまり興味をもつていなかつたのであり、この点は幼少期から科举の勉強をきらい、功名を求めなかつたことと恐らく相当、関係があらうし、また、この時期の宋明理学への批判といふ社会思潮とも無縁ではなかつたのであらう。孔子・顔回の心法にはまだしも肯定的であり、讀えもしたが、これは明らかに、『莊子』に描かれた孔子・顔回像やその心法の影響を受けたからであり、実際には道家化した儒家の孔子なり顔回を考えていたのである。

(22) 楊文会は『大乘起信論』によって仏教信仰の機が啓かれたことから、同論および「その作者とみなした」馬鳴をたいそう重視した。『大乘起信論』は仏教の入門書で

の相に名言を立てて分別すること」ととの『起信論』でいう六箇=枝末無明の六相のうちの「二相にほかならない」。「周」「濂溪」・張「橫渠」・程「明道・伊川」・朱「子」や心学の差異はわずかに明了の意識(前五識(五感)に伴つて働き、明瞭に客観界を觀取する意識で、四種意識の一)での工夫にあるだけで、第一の関門がまだ突破できない」(「評方植之向裏微言」、「雜錄」卷四)のである。そもそも楊文会は、宋明理学で仏學に附会したり、仏學で宋明理学に附会したりするやり方に不満であった。それゆえ、以下のように述べる。「仏家の実践の効用をこごとく抹殺してしまい、單に性理の説をとりだして、仏家を儒家とませ合しても仏を讀えることにはならず、実は仏を貶めることになる。もし仏法がたかだか宋儒と等しいだけのことなら、卓越した英傑が身命をなげうつてまで入信しようとするだらうか」(同上)、と。さらに『居士伝』汪大紳評語の後に書すでもこう批判する。「『居士伝』における汪大紳の評語は直截痛快で、まことに大師の手眼を備えている。けれどもいちいち程朱を引き、契合する、と評しているのはどうも妥当ではない。

仏教の理論と実践の面では、楊文会は一生、「教理は賢首の教えに依り、修行面では弥陀に依った」のであるが、同時に、唯識・天台・禪等の各宗派をも熱心に研究し、融通しようとした。彼みずから述べた聞法の経歴によると、「大乘の機は馬鳴に啓かれ、淨土の縁は蓮池(明の株宏)により、華嚴学は方山(唐の李通玄)に従い、參禪では高峰(元の原妙「臨濟宗」)を仰慕した。ほかにたとえば、明の慈山(德清)も日頃から敬服していた」(「与日本南条文雄書」)、「雜錄」卷七)。さらに「某君に与える書「簡」での言及では、「はじめて仏法を学んだころは蓮池・慈山に私淑し、さかのぼって賢首(唐の法藏)・清涼(唐の澄觀)、さらにその源までさかのぼって馬鳴・龍樹に帰依した。この二菩薩は、駕馳の遺教における大導師であり、印度・中国の教律禪淨がみな帰依するところである。その規範に従つて学生を教授すれば、決して人を誤まらせることはない」(『雜錄』卷六)、とする。

楊文会は『大乘起信論』によって仏教信仰の機が啓かれたことから、同論および「その作者とみなした」馬鳴をたいそう重視した。『大乘起信論』は仏教の入門書で

あり、各宗を融通し、群經に通ずる大乘仏教の根本典籍であるとみなす。その『起信論』の各種の注疏のなかでも、楊文会は賢首＝法藏の『大乘起信論義記』・『別記』を最も重んじた。そのため、以下のようにしきりに力説する。『大乘起信論』は仏教を学ぶ上での綱領である。まず本文を習熟するまで「読誦し、それから『義記』と『別記』を熱心に研究すれば、出世間法においては、まずまだということになる」（『与陳大鑑・陳心來書』、『雜錄』卷六）。「いの論は群經の要義を総括しており、法藏がその注解を作つて、その妙義を明らかにし尽している。熟読深思すれば、学徒はおのずと三藏教海『仏一代の教』に通ずることができる」（『仏學書目表』、『雜錄』卷二）。「内典『仏典』はあまりにも多い。どこから手をつけければ効少なくして速効をあげられるだろうか。それは、馬鳴菩薩作の『起信論』がよい。わずか一巻、一万字ではあるが、精微深遠で、群經に通じている」（『三身義』、『雜錄』卷一）。「『起信論』は専ら性宗を説いたものとはいえ、唯識法相をも兼ねている。相は性でなくては融通できないし、性は相でなければ顯わせない」（『起信論疏法數別錄跋』、

ます本文を習熟するまで「讀誦し、それから『義記』と『別記』を熱心に研究すれば、出世間法においては、まずまだということになる」（『与陳大鑑・陳心來書』、『雜錄』卷六）。「いの論は群經の要義を総括しており、法藏がその注解を作つて、その妙義を明らかにし尽している。熟

讀深思すれば、学徒はおのずと三藏教海『仏一代の教』に通ずることができる」（『仏學書目表』、『雜錄』卷二）。「内典『仏典』はあまりにも多い。どこから手をつけければ効少なくして速効をあげられるだろうか。それは、馬鳴菩薩作の『起信論』がよい。わずか一巻、一万字ではあるが、精微深遠で、群經に通じている」（『三身義』、『雜錄』卷一）。「『起信論』は専ら性宗を説いたものとはいえ、唯識法相をも兼ねている。相は性でなくては融通できないし、性は相でなければ顯わせない」（『起信論疏法數別錄跋』、

『雜錄』卷五）。そのため、『大宗地玄文本論』の『略註』を念入りに著した。楊文会の説では「百部の論のうち、この論が宗本であり」（『略註』卷四第三十九分注）、「この論は仏法の宗本で、精微奥妙を極めているので玄文といふ。……玄妙法門を知らうとするなら、この論を読むよう」（同上第四十分注）、とする。とりわけ、この論の「金剛五位」<sup>(27)</sup>説を称讃し、この「五位判教は釈迦如来の大法を余すことなく総括しており、まことに救弊補偏の要道である」（『与李小芸書』、『雜錄』卷五）とみなす。具体的には、この論が建立した「金剛五位」は「仏法の総綱であり、一切の破障法門を摂め尽し、一切の称性「応機の末法ではない、根本の教えを説く」法門を包括して余すところがない。この義を明らかにできれば、教「禪宗外の教派」か宗「教外別伝を唱える禪宗」か、また有宗か空宗かを問わず、いずれを説こうともさしつかえなく、河を分けて水を飲むごとく是非を争うような愚かしいことはしない」（『略註』序説）のだと。この論の目録を記したあとの評語ではこう指摘している。「いの論は精微奥妙を極めており、専ら利根上智を応接し、同時に

『雜錄』卷三）。「馬鳴大士撰の『起信論』は宗教全般に通じていて、初心者の手引きとなる。この内容を理解しなければ経中の奥義に到達するすべはない」（『起信論真妄生滅法相図跋』、『雜錄』卷三）。総じていえば、「馬鳴大士は百部大乗經を宗として『起信論』を著し、一心二門「心真如門と心生滅門」で仏教の大綱を総括している。学徒がこの論を規範にして、教律禪淨のすべてに通じ、小乗から大乗に転じ、破邪顯正することができれば、まことに如來の真子「菩薩」となるであろう」（『佛教初學課本』、<sup>(28)</sup>註）、と。

唐の賢首＝法藏は『大乘起信論』によって『華嚴經』の思想をとき表し、中国的な特色をもつ華嚴宗の教理を樹立した。<sup>(29)</sup>楊文会はこの賢首の伝統を繼承、発展させようと考え、さらには賢首から馬鳴にまでさかのぼろうとした。「この論『起信論』を学んだものはすべて馬鳴大士の徒である」（『与鄭陶齋書』、『雜錄』卷六）とし、「『大乘起信論』を根本とし、さらに馬鳴著だと伝えられるもうひとつの大乗論『大宗地玄文本論』に依拠して、「馬鳴宗を建立し」ようと考えていた（『与李小芸書』、

である。そのため、弟子には華厳に精通した者もあれば、三論や密教を専修した者もあり、とりわけ唯識法相学の研究に成果をあげた者が最も多く、まさしく百花齊放、各宗並茂であったということができる。

楊文会は『学仏浅説』において、仏教の学び方は各人の根器によってそれぞれ違がある、と説く。「利根上智の士はただちに思慮分別を断ち、本源の性地を徹見し、体用を全面的に顯現し、修行によって証悟するまでもなく、生死・涅槃が平等一如となる」。しかしこのような利根上智の士は「近世まれである」。そのつぎの者は、「解の道」「理論的知識を得る方法」から入る「べきもので、すなわち『まず『大乗起信論』を読み、はつきり理解するまで研究し、それから『楞嚴』・『田観』・『楞伽』・『維摩』等の經を読み、漸次、『金剛』・『法華』・『華厳』・『涅槃』の諸部に及び、『瑜伽』・『智度』等の論まで読み至る。そうしてはじめて解によって行を起し『実践的修行を積む』、行が起つて解が断たれ、真法界に証入する」。だが、こういう根器の人も、最終的には「やはり淨土に廻向し、

書」「雜錄」卷五)、「中下の根機はただ教に依つて勤修すべきで、みだりに頗悟を望んではならない。法が根機に投合しなければ、無益徒勞である」(『仏教初學課本註』)。念佛往生の淨土法門だけが「上中下の」三根をあまねく包摂し、「末法の修行」における「速成にして不退転、仏果に直行する」「普度法門」となるものだ(般若波羅密多会演説三)、「雜錄」卷一)、と。それゆえ楊文会は淨土法門を大いに宣揚し、一生、淨土法門に帰依したのである。

また楊文会はこう指摘している。「華嚴經」末で、普賢は十大願によつて極樂に導こうとし、……その後、馬鳴大士作の『起信論』もまた極樂に帰するものとしている<sup>(30)</sup>。龍樹作の『十住』・『智度』等の論でも、淨土に帰するよう、一度ならず説いている(『十宗略説』)。それゆえ、「一切の仏法によつて念佛の一門に入るというのが、『華嚴經』の融摶無礙の主旨なのである」(『与陳仲培書』、「雜錄」卷五)。また「仏学の最も高いのは禅宗であり、最も広いのは淨土である。禅宗は根器を選ぶが、淨土はあまねく包摂する。今時の禅宗を尊ぶ者は淨土を軽視す

弥陀に拝謁してはじめて永遠に生死を断ち、無上道「仏道」を得ることができる」。さらにその次位の者は、「普度「普く救済する」法門によつて専ら阿弥陀仏の接引「応接引導」の神力を信じ、往生を発願する」とともに、

自己の能力に応じて「淨土の經典もしくは内容の簡単な啓蒙書を読むか、さもなくばただ弥陀の名号を受持し、一心に専ら念じても、やはり淨土に往生できる。見仏証道「証悟」には遅速の差はあっても、生死を超脱し、永遠に輪廻を免れるという点では同じである」(『雜錄』卷一)、と。つまり、「利根上智の士」を度外視すれば、淨土法門が生死輪廻を超脱する自度度人「自ら救い、人を救う」の最も根本的な方法だ、というのである。楊文会には、釈尊の滅度「涅槃」から二千年后の今日、「利根はだんだんみられなくなり」、今昔の人物の根器を較べると、その「高下はひどくかけ離れており」、当世、参禪者は多いが、結局、「根機と法とが適合していないので、得道はひどく難しい」(答慶迪心偈)、「雜錄」卷四)、と思われた。そこで彼は以下のようと考えた。「修習法門では、根機にかなつてゐることが大事だ」(『与陳仲培書』)

るが、馬鳴や龍樹の現身説法「仏がこの世に現れて説法する」はつとに車の両車輪のごとく、両者を補い用いていたのである」(『仏教初學課本註』)。總じていえば、「淨土の一門は一切の法門を包括し尽しておらず、一切の法門はみな淨土の一門に向かう。これは純雜無礙で、利根上智のみの行なう道である」(『与李澹緣書』)、「雜錄」卷六)、と。しかしながら、一般に仏学の徒は「往往にして淨土を輕んじて性理を尊ぶ」もので、楊文会自身にしたところで、「仏法を学びはじめた時にはやはりこういう見があつた」のだが、ただ「弥陀疏鈔」を読んではじめて淨土の深妙なることを知り、それまでの偏見はすっかり消えてしまつた」のだといふ<sup>(31)</sup>。すなわち、人びとが淨土を軽視するのは、主に淨土の深妙なる理論への理解が不十分で、仏教の円融の主旨がしつかり理解できていないことからきている、というわけである。「利根の士で性理を高談して蓮邦「西方淨土」を軽視するような者はみな空有圓融の理に違しておらず、大海を乗せて一滴水を見るようなものだ」(『西方極樂世界依正莊嚴圓図跋』、「雜錄」卷三)、と。このように考えた楊文会は淨土法門への研究を深めつつ、

多くの独創的な見解を示したのである。<sup>(32)</sup>

楊文会の浄土理論は、經論を総合し、禪宗とそれ以外の教派を融合し、自性「自心の中」の弥陀と西方の弥陀、唯心淨土「淨心による現世淨土説」と仏土淨境「仏土にあるものは淨化されるという説」の不二を唱え、前後際「時空の前後対立視」を截断して当前の一念、現前の一句を往生の正因とみなすよう主張するものである。具体的な実踐法では、観想と持名「阿弥陀仏の名号を受持すること」との兼修を上法とし、經論の必修を初步とし、自力・他力双方の重視を不变の定論とすることを何よりも強調するのである。

『十宗略説』において、楊文会は、自性の弥陀と西方の弥陀とを対立させて排斥しあう見方について論評する。「のちに入びとは唯心淨土と自性の弥陀の説とを好んであげ、西方の弥陀は心外に法を認めるものとして排除するようになつたが、これは玄妙を欲してかえつて浅薄・固陋になつてゐるのだ」と。淨土の三經一論「無量壽」『觀無量壽佛』『阿彌陀』經・『往生論』の理論に従

つて、淨土往生法門は「去「死去」すれば必ず「西方淨土に」往き、生れるのもまた必ず「西方淨土」に生れる」という「人境俱不奪「本来は禪の「四料揃」『臨濟錄』の第四で、人（主觀）・境（客觀）ともに存するという立場」を宗とするべきである。すなわち、淨土を修める者は一切唯心、一切唯識で「心外に境はなく、境外に心はない」という心・境「自他不二」の理をよく理解するべきだ（以上は『十宗略説』に見える）、とみなすのである。具体的には、「大地山河、目前の万物は唯一識の所現であり、つきつめれば実体はない」（『与釈幻人書二』、『雜錄』卷五）ばかりか、「莊嚴たる淨土にしても、唯一識の表現であることから離れることはない」（『与桂伯華書一』、『雜錄』卷六）とか、「真法界は思議をはるかに絶していることを知るべきで、その体についていえば微塵も存立しないが、その用についていえば万有がみな顯現するのである。娑婆は唯一心の所現である以上、極樂がどうして唯心をはづれているだろうか」（「西方極樂世界依正莊嚴圓圖跋」、『雜錄』卷三）、と述べる。<sup>(33)</sup>こうして境（西方の弥陀）と心（自性の弥陀）とは彼此の区別がなくなつてしまふのであ

る。唐の善導が創めた淨土法門は「指方立相」「方を指し相を立てる」、すなわち西方に淨土があり、心外に弥陀を仰ぐのだと主張する。その善導の『觀無量壽佛經疏』には、「いまこの觀門等は、ただ方を指して相を立て、心を住めて境を取る「莊嚴たる淨土を心中に觀想する」のみで無相離念を明かすことはなかつた」とある。宋の王日休も『龍舒淨土文』で「世の禪の專修者が言うに、唯心淨土なのであって、ほかにまた淨土があろうはずはないし、自性の弥陀なのであって、さらに弥陀に見える必要はない、と。これは是に似て非なる言である」と述べている。こののち、この問題について多くの論争があった。楊文会は「西方の弥陀を排除する」という傾向を指弾しているとはいえた。楊文会は「西方の弥陀を排除する」という説では、「西方の弥陀を排除する」といふ傾向を指弾しているとはいえた。楊文会は「西方の弥陀を排除する」という説では、「西方の弥陀を排除する」といふ傾向を指弾しているとはいえた。

論の全体からみれば、明らかに唯識・華嚴・禪宗等の一切唯心・一切唯識・明性成仏等の理論を吸収しており、そこから「自性の弥陀」の思想を伝統的な淨土の立相取境の思想と調和させようとしているのである。<sup>(34)</sup>

そうした楊文会の禪淨融合論は、前後際を截断して当前の一念、現前の一句を往生の正因とみなすべきだと主張するのである。

『觀無量壽佛經』では、十惡五逆を犯した人でも、臨終時に

に一念に称名（阿弥陀仏の名を称える）しさえすれば往生

できる、と主張している。これについては、楊文会は二

方面から以下のように解釈する。ひとつには、一切衆生はすべて仮性を具えていて、諸仏と無二無異であり、よつて淨土に往生できる、ということ。<sup>(36)</sup> もうひとつには、

當念のもと、即座に前後が同時に頓現し、弥陀の願力と接し、一刹那にして淨土に生じる、ということだ、と。

そこでこう説く。「理からいえば、下品<sup>(37)</sup>の生の場合、仏法をこれほど速かには得られない。けれども称性法門は前後なく、一時に頓現し、百年千年後のこととも頃刻の間に尽く見聞する。長時が短時となり、短時が長時となる、と〔華嚴で〕いうことで、凡夫の意識では測り及ばない。念佛者は弥陀の願力と接しており、一刹那のうちにたちに彼岸に生ずる。眞の淨界のうちにどんな隔てがある

うか」（『与沈雪峰書』、『雜錄』卷五）、と。楊文会にとって、

淨土法門はかくも速か、かくも妙なるものである。「この念佛往生の一門こそは円頓教中における捷徑である」

〔『十宗略説』〕と絶讚するのも無理ない。

と教導しているのか、と指摘するのである。観想と持名

とは全く別の道ではなく、互いに融攝するものだ、とい

うのが楊文会の考え方であった。『日本僧一柳の「讀觀經

眼」を評す』においてそれをたいへん明確にしている。

『觀經』末に、「仏は阿難に、汝、よくこの語を持せよと告げられた。この語を持せよとは、すなわち無量寿仏の名を持つこと」とある。「よくこの語を持せよ」という句は、その前に説く觀法を持つること」とさとしたもので、「すなわち無量寿仏の名を持つこと」の句は観想と持名との互攝を明らかにしているのである。仏は、

後世の人が観想と持名とを全く別の道だとみなすのを恐れ、それでこういう融攝を説くことばを述べてさとしたのである」（『雜錄』卷四）、と。『觀經略論』ではさらに

『觀經』で説く十六觀法と九品往生などに簡潔な疏論を施し、そこでしきりに華嚴の円融無礙の理を融合して、

前人未発の点を明らかにしている。たとえば、第十二觀普觀想の疏論では、この行に到達した者はすでに上品上

生を超えているが、それはこの觀想で到達する境地が事事無礙の境地だからだ、と説く。また第十三觀雜想觀の

持名法というものは淨土法門のうち最も簡便な法である。

そのため、専ら持名を重んじる淨土宗派もある。もし専ら持名を重んじる者の「信願を切至」にできれば、やはり淨土に往生することができる、と楊文会もみなしさした。しかし淨土三經の根本教義からいえば、「この宗は

觀想・持名の兼修を上法とする」（『十宗略説』）ものである。楊文会は『觀無量壽佛經略論』では、ひきのように説いている。「淨土の宗旨は三經を根本とする。大經（『無量壽經』）は本願を尊び、この經は専ら觀想を重視し、小

經（『阿彌陀經』）は専ら持名を主張する。觀法は深遠精微で鈍根の者には入り難いので、近代の諸師は専ら持名の

一門を主張している。だがもし觀想がすばり用いないでよいのなら、大小の二經でどうして極樂世界、依正「仏國土と仏身」の莊嚴を詳細に表現できようか」と。また、

唐の善導に「仏本願を觀察する主意は仏名の專称にある」という説があるが、楊文会はこれにも異議を唱える。

「もし仏が専ら持名を重んじたのなら、『觀經』〔『觀無量壽佛經』〕ではどうして觀想の法によつて、韋提希を諱諱する」などと、楊文会はこれにも異議を唱える。『觀經』ではどうして觀想の法によつて、韋提希を諱諱する

疏論では、ことさら華嚴と極樂との教理上的一致を説く。「菩薩行門は二種を出ない。ひとつは上に仏道を求める

こと、もうひとつは下に衆生を化することである。……

前者の觀法は自心をすっかり弥陀の願海に投入してしま

うものであり、後者の觀法は弥陀の願海をすっかり包摶して自心に帰し入れてしまふことである。このように幾

重にもいりくみ、あまねく包容するのであるから、華嚴と極樂とが異趣であるなどとはとてもいえない」。さら

に「無始以來、さまざま善惡の業を具して、無量の差別相を呈しているのが、いま一念の觀のうちに九品がと

もに往生してそこから脱出すること、それが觀行である。

それは法界の衆生がそのまま自性の衆生で無二無別、非

一非異、といわれていることなのである。このような妙

法は不思議解脱境界に入るのになければどうして得られるだろうか」と。つまり、淨土の觀想法門の深遠奥妙

などこなは華嚴の円融無碍の主旨とともに不思議解脱境界に入るのであって、異趣ではない、というのである。

これは楊文会の創見で、華嚴教理によつて『觀經』理論を發展させたものである。

」のほか、楊文会は『觀經略論』等の著作において、さらに以下のことく念佛と称名との区別を説く。「念佛と称名とは異なる。心中で思い念するのを念佛といい、口で名号を唱えるのを称名という。憂いきわまた衆生は病苦に迫られ、心で念することはできないが、口ではあたかも父母を呼ぶように仏名を唱えることができ、その痛切なる声は弥陀の大悲と應ずるので、往生することができる」（『觀無量壽佛經略論』）、と。それゆえ、念佛と称名とを区別せず、念佛とはすなわち口で仏号を唱えることだとみなす日本の淨土真宗を、以下のごとく批判する。

「念とは心で念ずることで、称とは、口で称することである。声を出すのをすなわち念とし、念すなわち声を出すこととするのは誤りである」。したがって「専ら持名を念佛とみなし、觀想等の法をすべて念佛外のものと決めつけるのは経意ではない」（『闡教編』「評選択本願念佛集」）、と。楊文会は、「称名は本来、念佛のうちにあり、念佛を称名だと限定してしまうなら、経意からそれる」（『闡教編』「評小乘念佛通」）とみなす。つまり、念佛とは持名・觀想等の法を内包する総合概念であり、それ

ゆえ「『觀經』で説く十六法門はすべて念佛法門」というわけである。詳しく述べ、「念佛には多くの門がある。仏の名号を念する、仏の本願を念する、仏の相好を念する、仏の光明を念する、仏の神力を念する、仏の功徳を念する、仏の智慧を念する、仏の実相を念する」等で、これらはすべて念佛法門に包括される（『闡教編』「評選択本願念佛集」）のだと。楊文会がこういう区別を指摘したのは、觀想の重要性を強調するためであった。

淨土門はのちには簡便化の一途をたどり、念佛・持名をおこなつて莊嚴たる樂土・仏相を觀想しさえすれば、そのまま弥陀の願力によって淨土仏國に往生することができる。経論の研鑽は不要だ、とするまでになつた。それに対して楊文会は、ただ名号を持するだけとか一心に専ら念佛だけでは、長い間には氣力が衰えて怠りやすく、横道にもそれかねないので、「深遠奧妙なる経論によって妄情を消去し、志氣をふるわせ、勇敢にまつしぐらに前進してこそ、途中で退転、墮落しないですむ」（『學仏淺說』、「雜錄」卷一），と考える。」<sup>(3)</sup> 」<sup>(4)</sup> 」<sup>(5)</sup> 」<sup>(6)</sup> 」<sup>(7)</sup> 」<sup>(8)</sup> 」<sup>(9)</sup> 」<sup>(10)</sup> 」<sup>(11)</sup> 」<sup>(12)</sup> 」<sup>(13)</sup> 」<sup>(14)</sup> 」<sup>(15)</sup> 」<sup>(16)</sup> 」<sup>(17)</sup> 」<sup>(18)</sup> 」<sup>(19)</sup> 」<sup>(20)</sup> 」<sup>(21)</sup> 」<sup>(22)</sup> 」<sup>(23)</sup> 」<sup>(24)</sup> 」<sup>(25)</sup> 」<sup>(26)</sup> 」<sup>(27)</sup> 」<sup>(28)</sup> 」<sup>(29)</sup> 」<sup>(30)</sup> 」<sup>(31)</sup> 」<sup>(32)</sup> 」<sup>(33)</sup> 」<sup>(34)</sup> 」<sup>(35)</sup> 」<sup>(36)</sup> 」<sup>(37)</sup> 」<sup>(38)</sup> 」<sup>(39)</sup> 」<sup>(40)</sup> 」<sup>(41)</sup> 」<sup>(42)</sup> 」<sup>(43)</sup> 」<sup>(44)</sup> 」<sup>(45)</sup> 」<sup>(46)</sup> 」<sup>(47)</sup> 」<sup>(48)</sup> 」<sup>(49)</sup> 」<sup>(50)</sup> 」<sup>(51)</sup> 」<sup>(52)</sup> 」<sup>(53)</sup> 」<sup>(54)</sup> 」<sup>(55)</sup> 」<sup>(56)</sup> 」<sup>(57)</sup> 」<sup>(58)</sup> 」<sup>(59)</sup> 」<sup>(60)</sup> 」<sup>(61)</sup> 」<sup>(62)</sup> 」<sup>(63)</sup> 」<sup>(64)</sup> 」<sup>(65)</sup> 」<sup>(66)</sup> 」<sup>(67)</sup> 」<sup>(68)</sup> 」<sup>(69)</sup> 」<sup>(70)</sup> 」<sup>(71)</sup> 」<sup>(72)</sup> 」<sup>(73)</sup> 」<sup>(74)</sup> 」<sup>(75)</sup> 」<sup>(76)</sup> 」<sup>(77)</sup> 」<sup>(78)</sup> 」<sup>(79)</sup> 」<sup>(80)</sup> 」<sup>(81)</sup> 」<sup>(82)</sup> 」<sup>(83)</sup> 」<sup>(84)</sup> 」<sup>(85)</sup> 」<sup>(86)</sup> 」<sup>(87)</sup> 」<sup>(88)</sup> 」<sup>(89)</sup> 」<sup>(90)</sup> 」<sup>(91)</sup> 」<sup>(92)</sup> 」<sup>(93)</sup> 」<sup>(94)</sup> 」<sup>(95)</sup> 」<sup>(96)</sup> 」<sup>(97)</sup> 」<sup>(98)</sup> 」<sup>(99)</sup> 」<sup>(100)</sup> 」<sup>(101)</sup> 」<sup>(102)</sup> 」<sup>(103)</sup> 」<sup>(104)</sup> 」<sup>(105)</sup> 」<sup>(106)</sup> 」<sup>(107)</sup> 」<sup>(108)</sup> 」<sup>(109)</sup> 」<sup>(110)</sup> 」<sup>(111)</sup> 」<sup>(112)</sup> 」<sup>(113)</sup> 」<sup>(114)</sup> 」<sup>(115)</sup> 」<sup>(116)</sup> 」<sup>(117)</sup> 」<sup>(118)</sup> 」<sup>(119)</sup> 」<sup>(120)</sup> 」<sup>(121)</sup> 」<sup>(122)</sup> 」<sup>(123)</sup> 」<sup>(124)</sup> 」<sup>(125)</sup> 」<sup>(126)</sup> 」<sup>(127)</sup> 」<sup>(128)</sup> 」<sup>(129)</sup> 」<sup>(130)</sup> 」<sup>(131)</sup> 」<sup>(132)</sup> 」<sup>(133)</sup> 」<sup>(134)</sup> 」<sup>(135)</sup> 」<sup>(136)</sup> 」<sup>(137)</sup> 」<sup>(138)</sup> 」<sup>(139)</sup> 」<sup>(140)</sup> 」<sup>(141)</sup> 」<sup>(142)</sup> 」<sup>(143)</sup> 」<sup>(144)</sup> 」<sup>(145)</sup> 」<sup>(146)</sup> 」<sup>(147)</sup> 」<sup>(148)</sup> 」<sup>(149)</sup> 」<sup>(150)</sup> 」<sup>(151)</sup> 」<sup>(152)</sup> 」<sup>(153)</sup> 」<sup>(154)</sup> 」<sup>(155)</sup> 」<sup>(156)</sup> 」<sup>(157)</sup> 」<sup>(158)</sup> 」<sup>(159)</sup> 」<sup>(160)</sup> 」<sup>(161)</sup> 」<sup>(162)</sup> 」<sup>(163)</sup> 」<sup>(164)</sup> 」<sup>(165)</sup> 」<sup>(166)</sup> 」<sup>(167)</sup> 」<sup>(168)</sup> 」<sup>(169)</sup> 」<sup>(170)</sup> 」<sup>(171)</sup> 」<sup>(172)</sup> 」<sup>(173)</sup> 」<sup>(174)</sup> 」<sup>(175)</sup> 」<sup>(176)</sup> 」<sup>(177)</sup> 」<sup>(178)</sup> 」<sup>(179)</sup> 」<sup>(180)</sup> 」<sup>(181)</sup> 」<sup>(182)</sup> 」<sup>(183)</sup> 」<sup>(184)</sup> 」<sup>(185)</sup> 」<sup>(186)</sup> 」<sup>(187)</sup> 」<sup>(188)</sup> 」<sup>(189)</sup> 」<sup>(190)</sup> 」<sup>(191)</sup> 」<sup>(192)</sup> 」<sup>(193)</sup> 」<sup>(194)</sup> 」<sup>(195)</sup> 」<sup>(196)</sup> 」<sup>(197)</sup> 」<sup>(198)</sup> 」<sup>(199)</sup> 」<sup>(200)</sup> 」<sup>(201)</sup> 」<sup>(202)</sup> 」<sup>(203)</sup> 」<sup>(204)</sup> 」<sup>(205)</sup> 」<sup>(206)</sup> 」<sup>(207)</sup> 」<sup>(208)</sup> 」<sup>(209)</sup> 」<sup>(210)</sup> 」<sup>(211)</sup> 」<sup>(212)</sup> 」<sup>(213)</sup> 」<sup>(214)</sup> 」<sup>(215)</sup> 」<sup>(216)</sup> 」<sup>(217)</sup> 」<sup>(218)</sup> 」<sup>(219)</sup> 」<sup>(220)</sup> 」<sup>(221)</sup> 」<sup>(222)</sup> 」<sup>(223)</sup> 」<sup>(224)</sup> 」<sup>(225)</sup> 」<sup>(226)</sup> 」<sup>(227)</sup> 」<sup>(228)</sup> 」<sup>(229)</sup> 」<sup>(230)</sup> 」<sup>(231)</sup> 」<sup>(232)</sup> 」<sup>(233)</sup> 」<sup>(234)</sup> 」<sup>(235)</sup> 」<sup>(236)</sup> 」<sup>(237)</sup> 」<sup>(238)</sup> 」<sup>(239)</sup> 」<sup>(240)</sup> 」<sup>(241)</sup> 」<sup>(242)</sup> 」<sup>(243)</sup> 」<sup>(244)</sup> 」<sup>(245)</sup> 」<sup>(246)</sup> 」<sup>(247)</sup> 」<sup>(248)</sup> 」<sup>(249)</sup> 」<sup>(250)</sup> 」<sup>(251)</sup> 」<sup>(252)</sup> 」<sup>(253)</sup> 」<sup>(254)</sup> 」<sup>(255)</sup> 」<sup>(256)</sup> 」<sup>(257)</sup> 」<sup>(258)</sup> 」<sup>(259)</sup> 」<sup>(260)</sup> 」<sup>(261)</sup> 」<sup>(262)</sup> 」<sup>(263)</sup> 」<sup>(264)</sup> 」<sup>(265)</sup> 」<sup>(266)</sup> 」<sup>(267)</sup> 」<sup>(268)</sup> 」<sup>(269)</sup> 」<sup>(270)</sup> 」<sup>(271)</sup> 」<sup>(272)</sup> 」<sup>(273)</sup> 」<sup>(274)</sup> 」<sup>(275)</sup> 」<sup>(276)</sup> 」<sup>(277)</sup> 」<sup>(278)</sup> 」<sup>(279)</sup> 」<sup>(280)</sup> 」<sup>(281)</sup> 」<sup>(282)</sup> 」<sup>(283)</sup> 」<sup>(284)</sup> 」<sup>(285)</sup> 」<sup>(286)</sup> 」<sup>(287)</sup> 」<sup>(288)</sup> 」<sup>(289)</sup> 」<sup>(290)</sup> 」<sup>(291)</sup> 」<sup>(292)</sup> 」<sup>(293)</sup> 」<sup>(294)</sup> 」<sup>(295)</sup> 」<sup>(296)</sup> 」<sup>(297)</sup> 」<sup>(298)</sup> 」<sup>(299)</sup> 」<sup>(300)</sup> 」<sup>(301)</sup> 」<sup>(302)</sup> 」<sup>(303)</sup> 」<sup>(304)</sup> 」<sup>(305)</sup> 」<sup>(306)</sup> 」<sup>(307)</sup> 」<sup>(308)</sup> 」<sup>(309)</sup> 」<sup>(310)</sup> 」<sup>(311)</sup> 」<sup>(312)</sup> 」<sup>(313)</sup> 」<sup>(314)</sup> 」<sup>(315)</sup> 」<sup>(316)</sup> 」<sup>(317)</sup> 」<sup>(318)</sup> 」<sup>(319)</sup> 」<sup>(320)</sup> 」<sup>(321)</sup> 」<sup>(322)</sup> 」<sup>(323)</sup> 」<sup>(324)</sup> 」<sup>(325)</sup> 」<sup>(326)</sup> 」<sup>(327)</sup> 」<sup>(328)</sup> 」<sup>(329)</sup> 」<sup>(330)</sup> 」<sup>(331)</sup> 」<sup>(332)</sup> 」<sup>(333)</sup> 」<sup>(334)</sup> 」<sup>(335)</sup> 」<sup>(336)</sup> 」<sup>(337)</sup> 」<sup>(338)</sup> 」<sup>(339)</sup> 」<sup>(340)</sup> 」<sup>(341)</sup> 」<sup>(342)</sup> 」<sup>(343)</sup> 」<sup>(344)</sup> 」<sup>(345)</sup> 」<sup>(346)</sup> 」<sup>(347)</sup> 」<sup>(348)</sup> 」<sup>(349)</sup> 」<sup>(350)</sup> 」<sup>(351)</sup> 」<sup>(352)</sup> 」<sup>(353)</sup> 」<sup>(354)</sup> 」<sup>(355)</sup> 」<sup>(356)</sup> 」<sup>(357)</sup> 」<sup>(358)</sup> 」<sup>(359)</sup> 」<sup>(360)</sup> 」<sup>(361)</sup> 」<sup>(362)</sup> 」<sup>(363)</sup> 」<sup>(364)</sup> 」<sup>(365)</sup> 」<sup>(366)</sup> 」<sup>(367)</sup> 」<sup>(368)</sup> 」<sup>(369)</sup> 」<sup>(370)</sup> 」<sup>(371)</sup> 」<sup>(372)</sup> 」<sup>(373)</sup> 」<sup>(374)</sup> 」<sup>(375)</sup> 」<sup>(376)</sup> 」<sup>(377)</sup> 」<sup>(378)</sup> 」<sup>(379)</sup> 」<sup>(380)</sup> 」<sup>(381)</sup> 」<sup>(382)</sup> 」<sup>(383)</sup> 」<sup>(384)</sup> 」<sup>(385)</sup> 」<sup>(386)</sup> 」<sup>(387)</sup> 」<sup>(388)</sup> 」<sup>(389)</sup> 」<sup>(390)</sup> 」<sup>(391)</sup> 」<sup>(392)</sup> 」<sup>(393)</sup> 」<sup>(394)</sup> 」<sup>(395)</sup> 」<sup>(396)</sup> 」<sup>(397)</sup> 」<sup>(398)</sup> 」<sup>(399)</sup> 」<sup>(400)</sup> 」<sup>(401)</sup> 」<sup>(402)</sup> 」<sup>(403)</sup> 」<sup>(404)</sup> 」<sup>(405)</sup> 」<sup>(406)</sup> 」<sup>(407)</sup> 」<sup>(408)</sup> 」<sup>(409)</sup> 」<sup>(410)</sup> 」<sup>(411)</sup> 」<sup>(412)</sup> 」<sup>(413)</sup> 」<sup>(414)</sup> 」<sup>(415)</sup> 」<sup>(416)</sup> 」<sup>(417)</sup> 」<sup>(418)</sup> 」<sup>(419)</sup> 」<sup>(420)</sup> 」<sup>(421)</sup> 」<sup>(422)</sup> 」<sup>(423)</sup> 」<sup>(424)</sup> 」<sup>(425)</sup> 」<sup>(426)</sup> 」<sup>(427)</sup> 」<sup>(428)</sup> 」<sup>(429)</sup> 」<sup>(430)</sup> 」<sup>(431)</sup> 」<sup>(432)</sup> 」<sup>(433)</sup> 」<sup>(434)</sup> 」<sup>(435)</sup> 」<sup>(436)</sup> 」<sup>(437)</sup> 」<sup>(438)</sup> 」<sup>(439)</sup> 」<sup>(440)</sup> 」<sup>(441)</sup> 」<sup>(442)</sup> 」<sup>(443)</sup> 」<sup>(444)</sup> 」<sup>(445)</sup> 」<sup>(446)</sup> 」<sup>(447)</sup> 」<sup>(448)</sup> 」<sup>(449)</sup> 」<sup>(450)</sup> 」<sup>(451)</sup> 」<sup>(452)</sup> 」<sup>(453)</sup> 」<sup>(454)</sup> 」<sup>(455)</sup> 」<sup>(456)</sup> 」<sup>(457)</sup> 」<sup>(458)</sup> 」<sup>(459)</sup> 」<sup>(460)</sup> 」<sup>(461)</sup> 」<sup>(462)</sup> 」<sup>(463)</sup> 」<sup>(464)</sup> 」<sup>(465)</sup> 」<sup>(466)</sup> 」<sup>(467)</sup> 」<sup>(468)</sup> 」<sup>(469)</sup> 」<sup>(470)</sup> 」<sup>(471)</sup> 」<sup>(472)</sup> 」<sup>(473)</sup> 」<sup>(474)</sup> 」<sup>(475)</sup> 」<sup>(476)</sup> 」<sup>(477)</sup> 」<sup>(478)</sup> 」<sup>(479)</sup> 」<sup>(480)</sup> 」<sup>(481)</sup> 」<sup>(482)</sup> 」<sup>(483)</sup> 」<sup>(484)</sup> 」<sup>(485)</sup> 」<sup>(486)</sup> 」<sup>(487)</sup> 」<sup>(488)</sup> 」<sup>(489)</sup> 」<sup>(490)</sup> 」<sup>(491)</sup> 」<sup>(492)</sup> 」<sup>(493)</sup> 」<sup>(494)</sup> 」<sup>(495)</sup> 」<sup>(496)</sup> 」<sup>(497)</sup> 」<sup>(498)</sup> 」<sup>(499)</sup> 」<sup>(500)</sup> 」<sup>(501)</sup> 」<sup>(502)</sup> 」<sup>(503)</sup> 」<sup>(504)</sup> 」<sup>(505)</sup> 」<sup>(506)</sup> 」<sup>(507)</sup> 」<sup>(508)</sup> 」<sup>(509)</sup> 」<sup>(510)</sup> 」<sup>(511)</sup> 」<sup>(512)</sup> 」<sup>(513)</sup> 」<sup>(514)</sup> 」<sup>(515)</sup> 」<sup>(516)</sup> 」<sup>(517)</sup> 」<sup>(518)</sup> 」<sup>(519)</sup> 」<sup>(520)</sup> 」<sup>(521)</sup> 」<sup>(522)</sup> 」<sup>(523)</sup> 」<sup>(524)</sup> 」<sup>(525)</sup> 」<sup>(526)</sup> 」<sup>(527)</sup> 」<sup>(528)</sup> 」<sup>(529)</sup> 」<sup>(530)</sup> 」<sup>(531)</sup> 」<sup>(532)</sup> 」<sup>(533)</sup> 」<sup>(534)</sup> 」<sup>(535)</sup> 」<sup>(536)</sup> 」<sup>(537)</sup> 」<sup>(538)</sup> 」<sup>(539)</sup> 」<sup>(540)</sup> 」<sup>(541)</sup> 」<sup>(542)</sup> 」<sup>(543)</sup> 」<sup>(544)</sup> 」<sup>(545)</sup> 」<sup>(546)</sup> 」<sup>(547)</sup> 」<sup>(548)</sup> 」<sup>(549)</sup> 」<sup>(550)</sup> 」<sup>(551)</sup> 」<sup>(552)</sup> 」<sup>(553)</sup> 」<sup>(554)</sup> 」<sup>(555)</sup> 」<sup>(556)</sup> 」<sup>(557)</sup> 」<sup>(558)</sup> 」<sup>(559)</sup> 」<sup>(560)</sup> 」<sup>(561)</sup> 」<sup>(562)</sup> 」<sup>(563)</sup> 」<sup>(564)</sup> 」<sup>(565)</sup> 」<sup>(566)</sup> 」<sup>(567)</sup> 」<sup>(568)</sup> 」<sup>(569)</sup> 」<sup>(570)</sup> 」<sup>(571)</sup> 」<sup>(572)</sup> 」<sup>(573)</sup> 」<sup>(574)</sup> 」<sup>(575)</sup> 」<sup>(576)</sup> 」<sup>(577)</sup> 」<sup>(578)</sup> 」<sup>(579)</sup> 」<sup>(580)</sup> 」<sup>(581)</sup> 」<sup>(582)</sup> 」<sup>(583)</sup> 」<sup>(584)</sup> 」<sup>(585)</sup> 」<sup>(586)</sup> 」<sup>(587)</sup> 」<sup>(588)</sup> 」<sup>(589)</sup> 」<sup>(590)</sup> 」<sup>(591)</sup> 」<sup>(592)</sup> 」<sup>(593)</sup> 」<sup>(594)</sup> 」<sup>(595)</sup> 」<sup>(596)</sup> 」<sup>(597)</sup> 」<sup>(598)</sup> 」<sup>(599)</sup> 」<sup>(600)</sup> 」<sup>(601)</sup> 」<sup>(602)</sup> 」<sup>(603)</sup> 」<sup>(604)</sup> 」<sup>(605)</sup> 」<sup>(606)</sup> 」<sup>(607)</sup> 」<sup>(608)</sup> 」<sup>(609)</sup> 」<sup>(610)</sup> 」<sup>(611)</sup> 」<sup>(612)</sup> 」<sup>(613)</sup> 」<sup>(614)</sup> 」<sup>(615)</sup> 」<sup>(616)</sup> 」<sup>(617)</sup> 」<sup>(618)</sup> 」<sup>(619)</sup> 」<sup>(620)</sup> 」<sup>(621)</sup> 」<sup>(622)</sup> 」<sup>(623)</sup> 」<sup>(624)</sup> 」<sup>(625)</sup> 」<sup>(626)</sup> 」<sup>(627)</sup> 」<sup>(628)</sup> 」<sup>(629)</sup> 」<sup>(630)</sup> 」<sup>(631)</sup> 」<sup>(632)</sup> 」<sup>(633)</sup> 」<sup>(634)</sup> 」<sup>(635)</sup> 」<sup>(636)</sup> 」<sup>(637)</sup> 」<sup>(638)</sup> 」<sup>(639)</sup> 」<sup>(640)</sup> 」<sup>(641)</sup> 」<sup>(642)</sup> 」<sup>(643)</sup> 」<sup>(644)</sup> 」<sup>(645)</sup> 」<sup>(646)</sup> 」<sup>(647)</sup> 」<sup>(648)</sup> 」<sup>(649)</sup> 」<sup>(650)</sup> 」<sup>(651)</sup> 」<sup>(652)</sup> 」<sup>(653)</sup> 」<sup>(654)</sup> 」<sup>(655)</sup> 」<sup>(656)</sup> 」<sup>(657)</sup> 」<sup>(658)</sup> 」<sup>(659)</sup> 」<sup>(660)</sup> 」<sup>(661)</sup> 」<sup>(662)</sup> 」<sup>(663)</sup> 」<sup>(664)</sup> 」<sup>(665)</sup> 」<sup>(666)</sup> 」<sup>(667)</sup> 」<sup>(668)</sup> 」<sup>(669)</sup> 」<sup>(670)</sup> 」<sup>(671)</sup> 」<sup>(672)</sup> 」<sup>(673)</sup> 」<sup>(674)</sup> 」<sup>(675)</sup> 」<sup>(676)</sup> 」<sup>(677)</sup> 」<sup>(678)</sup> 」<sup>(679)</sup> 」<sup>(680)</sup> 」<sup>(681)</sup> 」<sup>(682)</sup> 」<sup>(683)</sup> 」<sup>(684)</sup> 」<sup>(685)</sup> 」<sup>(686)</sup> 」<sup>(687)</sup> 」<sup>(688)</sup> 」<sup>(689)</sup> 」<sup>(690)</sup> 」<sup>(691)</sup> 」<sup>(692)</sup> 」<sup>(693)</sup> 」<sup>(694)</sup> 」<sup>(695)</sup> 」<sup>(696)</sup> 」<sup>(697)</sup> 」<sup>(698)</sup> 」<sup>(699)</sup> 」<sup>(700)</sup> 」<sup>(701)</sup> 」<sup>(702)</sup> 」<sup>(703)</sup> 」<sup>(704)</sup> 」<sup>(705)</sup> 」<sup>(706)</sup> 」<sup>(707)</sup> 」<sup>(708)</sup> 」<sup>(709)</sup> 」<sup>(710)</sup> 」<sup>(711)</sup> 」<sup>(712)</sup> 」<sup>(713)</sup> 」<sup>(714)</sup> 」<sup>(715)</sup> 」<sup>(716)</sup> 」<sup>(717)</sup> 」<sup>(718)</sup> 」<sup>(719)</sup> 」<sup>(720)</sup> 」<sup>(721)</sup> 」<sup>(722)</sup> 」<sup>(723)</sup> 」<sup>(724)</sup> 」<sup>(725)</sup> 」<sup>(726)</sup> 」<sup>(727)</sup> 」<sup>(728)</sup> 」<sup>(729)</sup> 」<sup>(730)</sup> 」<sup>(731)</sup> 」<sup>(732)</sup> 」<sup>(733)</sup> 」<sup>(734)</sup> 」<sup>(735)</sup> 」<sup>(736)</sup> 」<sup>(737)</sup> 」<sup>(738)</sup> 」<sup>(739)</sup> 」<sup>(740)</sup> 」<sup>(741)</sup> 」<sup>(742)</sup> 」<sup>(743)</sup> 」<sup>(744)</sup> 」<sup>(745)</sup> 」<sup>(746)</sup> 」<sup>(747)</sup> 」<sup>(748)</sup> 」<sup>(749)</sup> 」<sup>(750)</sup> 」<sup>(751)</sup> 」<sup>(752)</sup> 」<sup>(753)</sup> 」<sup>(754)</sup> 」<sup>(755)</sup> 」<sup>(756)</sup> 」<sup>(757)</sup> 」<sup>(758)</sup> 」<sup>(759)</sup> 」<sup>(760)</sup> 」<sup>(761)</sup> 」<sup>(762)</sup> 」<sup>(763)</sup> 」<sup>(764)</sup> 」<sup>(765)</sup> 」<sup>(766)</sup> 」<sup>(767)</sup> 」<sup>(768)</sup> 」<sup>(769)</sup> 」<sup>(770)</sup> 」<sup>(771)</sup> 」<sup>(772)</sup> 」<sup>(773)</sup> 」<sup>(774)</sup> 」<sup>(775)</sup> 」<sup>(776)</sup> 」<sup>(777)</sup> 」<sup>(778)</sup> 」<sup>(779)</sup> 」<sup>(780)</sup> 」<sup>(781)</sup> 」<sup>(782)</sup> 」<sup>(783)</sup> 」<sup>(784)</sup> 」<sup>(785)</sup> 」<sup>(786)</sup> 」<sup>(787)</sup> 」<sup>(788)</sup> 」<sup>(789)</sup> 」<sup>(790)</sup> 」<sup>(791)</sup> 」<sup>(792)</sup> 」<sup>(793)</sup> 」<sup>(794)</sup> 」<sup>(795)</sup> 」<sup>(796)</sup> 」<sup>(797)</sup> 」<sup>(798)</sup> 」<sup>(799)</sup> 」<sup>(800)</sup> 」<sup>(801)</sup> 」<sup>(802)</sup> 」<sup>(803)</sup> 」<sup>(804)</sup> 」<sup>(805)</sup> 」<sup>(806)</sup> 」<sup>(807)</sup> 」<sup>(808)</sup> 」<sup>(809)</sup> 」<sup>(810)</sup> 」<sup>(811)</sup> 」<sup>(812)</sup> 」<sup>(813)</sup> 」<sup>(814)</sup> 」<sup>(815)</sup> 」<sup>(816)</sup> 」<sup>(817)</sup> 」<sup>(818)</sup> 」<sup>(819)</sup> 」<sup>(820)</sup> 」<sup>(821)</sup> 」<sup>(822)</sup> 」<sup>(823)</sup> 」<sup>(824)</sup> 」<sup>(825)</sup> 」<sup>(826)</sup> 」<sup>(827)</sup> 」<sup>(828)</sup> 」<sup>(829)</sup> 」<sup>(830)</sup> 」<sup>(831)</sup> 」<sup>(832)</sup> 」<sup>(833)</sup> 」<sup>(834)</sup> 」<sup>(835)</sup> 」<sup>(836)</sup> 」<sup>(837)</sup> 」<sup>(838)</sup> 」<sup>(839)</sup> 」<sup>(840)</sup> 」<sup>(841)</sup> 」<sup>(842)</sup> 」<sup>(843)</sup> 」<sup>(844)</sup> 」<sup>(845)</sup> 」<sup>(846)</sup> 」<sup>(847)</sup> 」<sup>(848)</sup> 」<sup>(849)</sup> 」<sup>(850)</sup> 」<sup>(851)</sup> 」<sup>(852)</sup> 」<sup>(853)</sup> 」<sup>(854)</sup> 」<sup>(855)</sup> 」<sup>(856)</sup> 」<sup>(857)</sup> 」<sup>(858)</sup> 」<sup>(859)</sup> 」<sup>(860)</sup> 」<sup>(861)</sup> 」<sup>(862)</sup> 」<sup>(863)</sup> 」<sup>(864)</sup> 」<sup>(865)</sup> 」<sup>(866)</sup> 」<sup>(867)</sup> 」<sup>(868)</sup> 」<sup>(869)</sup> 」<sup>(870)</sup> 」<sup>(871)</sup> 」<sup>(872)</sup> 」<sup>(873)</sup> 」<sup>(874)</sup> 」<sup>(875)</sup> 」<sup>(876)</sup> 」<sup>(877)</sup> 」<sup>(878)</sup> 」<sup>(879)</sup> 」<sup>(880)</sup> 」<sup>(881)</sup> 」<sup>(882)</sup> 」<sup>(883)</sup> 」<sup>(884)</sup> 」<sup>(885)</sup> 」<sup>(886)</sup> 」<sup>(887)</sup> 」<sup>(888)</sup> 」<sup>(889)</sup> 」<sup>(890)</sup> 」<sup>(891)</sup> 」<sup>(892)</sup> 」<sup>(893)</sup> 」<sup>(894)</sup> 」<sup>(895)</sup> 」<sup>(896)</sup> 」<sup>(897)</sup> 」<sup>(898)</sup> 」<sup>(899)</sup> 」<sup>(900)</sup> 」<sup>(901)</sup> 」<sup>(902)</sup> 」<sup>(903)</sup> 」<sup>(904)</sup> 」<sup>(905)</sup> 」<sup>(906)</sup> 」<sup>(907)</sup> 」<sup>(908)</sup> 」<sup>(909)</sup> 」<sup>(910)</sup> 」<sup>(911)</sup> 」<sup>(912)</sup> 」<sup>(913)</sup> 」<sup>(914)</sup> 」<sup>(915)</sup> 」<sup>(916)</sup> 」<sup>(917)</sup> 」<sup>(918)</sup> 」<sup>(919)</sup> 」<sup>(920)</sup> 」<sup>(921)</sup> 」<sup>(922)</sup> 」<sup>(923)</sup> 」<sup>(924)</sup> 」<sup>(925)</sup> 」<sup>(926)</sup> 」<sup>(927)</sup> 」<sup>(928)</sup> 」<sup>(929)</sup> 」<sup>(930)</sup> 」<sup>(931)</sup> 」<sup>(932)</sup> 」<sup>(933)</sup> 」<sup>(934)</sup> 」<sup>(935)</sup> 」<sup>(936)</sup> 」<sup>(937)</sup> 」<sup>(938)</sup> 」<sup>(939)</sup> 」<sup>(940)</sup> 」<sup>(941)</sup> 」<sup>(942)</sup> 」<sup>(943)</sup> 」<sup>(944)</sup> 」<sup>(945)</sup> 」<sup>(946)</sup> 」<sup>(947)</sup> 」<sup>(948)</sup> 」<sup>(949)</sup> 」<sup>(950)</sup> 」<sup>(951)</sup> 」<sup>(95</sup>

ちには、いかなる自力の修行をも根本的に排斥し、淨土の主旨は他力の提唱であると力説し、いわゆる「純他力教」を創立した者までいた。そのため、楊文会は日本の淨土真宗の僧侶たちとくりかえし論争<sup>(43)</sup>するとともに、自力・他力双方の重視という自説を詳述した。

楊文会はくりかえして述べる。「信心があつて往生を発願する者は、すべてが臨終の時に弥陀の接引の力にすがるので、「宋の永明大師のいうように」『万修万人去』〔修めたものは誰でも成仏する〕できる。だが往生は他力にすがるとはいえ、やはり自力を廃しはしないので、『修』の字で勉励しているのである」(『般若波羅密多会演説三』、『雜錄』卷一)。「仏教で説く接引による往生はすべて他力の教でありながら、やはり自力を廃することはない。自力を廃すれば、無窮の過失に陥る」(『評日本僧一柳純他力論』、『雜錄』卷四)。それゆえ淨土門は「他力を信ずる上に自力をも尽す」(『十宗略説』)べきである、と。楊文会の考えでは、日本の淨土真宗が淨土門と聖道門とをはつきり分け、念佛往生(他力)と誦行往生(自力)とを対立させるのは、経意に背く。そこでこう力説する。「聖

者がいて、人を迷つてふんぎりがつかないようにさせ、直往の機を妨げることがあつた。また専ら他力を重視する者もいて、俗縁を捨てられなくなり、空しく慈尊の望みを負う羽目になつた。だから、自他の名に執着して対立させるべきではなく、互いに包摵融合させるべきなのである。自他の二力のどちらも廃すべきではないのは、「車の両車輪、鳥の両翼と同様で、宝所に直行して、永遠に輪廻を脱する」(『般若波羅密多会演説三』、『雜錄』卷二)のだ、と。

他力を信仰するとともに自力を尽す必要性を楊文会が説いたのは、少なくとも二つの理由があつてのことである。まず、西方淨土への往生を願う信心は自力によつてはじめて生ずる、と考えるからである。「他力は普遍平等だが、衆生には信する者と信じない者がおり、それぞれ自力によらずして信心を生ずることがあるうか」(『闡教編』「評真宗教旨」)。「公平に言えば、他力を信ずるといつても、やはり自力で信ずることができるので」(『闡教編』「雜評」)、と述べている。つぎに、この法門では、「人品の高低・見仏の遲速・証道の深浅・受記「未來の成仏を仏

道は十方刹土の解脱の門径であり、西方淨土に生れた人も聖道によって妙果を証するのである」。「弥陀は大願を發したうえ、聖道を勸修してはじめて円満たりうる」。よつて、「淨土もまた聖道無量門のうちの一門であり」、「もし初修の時に聖道の廢棄を唱えるなら、淨土の宗旨に背くことになる」(『闡教編』「評真宗教旨」)、と。かたや真宗の学者は、往生信心は全面的に他力から発するものだと強調し、「帰命の心は自己から生ずるのではなく、仏勅によって生ずるのである。それゆえ、他力信心というのだ」と説く。楊文会のほうは、「仏勅を受けることができるのは自心なのである。だからやはり自心から生ずるのだ」とみなす。そこで、「実義を論ずると、信心とは自心の所起である。他力とは自心からみた他力である。現前の「念」以外に何があるうか」とさえい、さらにはより徹底して、「自他はいざれも仮名である。仮名の自を廃しながら仮名の他を立て、妙用自在に兎角を龜毛にとりかえる「兎角も龜毛も集体がない」というわけだ。実法だと執着しなければよいが」(同上)、と論じるのである。そして、こう指摘する。「のちに専ら自力を重視する

から予言される」の先後はいざれも自力修行の違いにかかるとしている」(『般若波羅密多会演説三』、『雜錄』卷二)、と考えるからである。結じていえば、「凡夫の往生は全面的に仏力にすがるのだが、自力で上下の差がつく。これは万古不変の定論である」(『評日本僧一柳純他力論』、『雜錄』卷四)、ということになる。このほか、菩提心を發するのは自力の雜行「正行でない行」だと真宗が断じて斥ける点にも、楊文会は厳しい批判をつけれる。「仏は菩提心から成ずるのであり、それはちょうど飯が米から作られるようなものである。かりに飯を食べたいが米を用いてはならないとなれば、飯は得られるか。念仏を願いながら菩提心を發することはまかりならぬとなれば、見仏で生きるか。仏とは畢竟、菩提である。菩提心を棄てねば得仏のすべはない。それはちょうど米を捨てれば食を得るすべがないようなものだ」(『闡教編』「雜評」)、と。

以上のように、淨土法門における自力・他力双方の重視という楊文会の説は、独創的な見解に富んでいる。楊文会と日本の淨土真宗の僧侶との論争は、淨土宗内部の異なる学派の異なる経義理解であり、異なる考え方の提唱

である。仏法理論について慎重な態度をとりつけ、ま  
ず軽々しくは論じない、と楊文会はみずから称した。彼  
が真宗を論評したのも、「討論すればするほど明らかに  
なり、自分にも相手にも利益になる」（同上）ようにとの  
願いをこめてのことであって、良き学風を発揚したので  
ある。

（44）  
楊文会はまた、宗教に人心を感化する力があると深く  
信じており、こう述べる。「地球上の各国はみな宗教で世  
道人心を維持している。もしひとりひとりが善惡のたし  
かな因果応報を深く信ずれば、惡を善に改める心がおの  
ずと本性から発現するし、ひとりひとりが感化すれば太  
平の世を実現することができる」（『南洋勸業会演説』、『雜  
錄』卷一）、と。彼はさらに、仏教で明らかにしている真  
性不滅・因果輪廻・造業受報等の理論は人に悪因を造ら  
ないようさせ、苦果を免れさせることができると、堅  
く信じていた。それゆえ、自度「自らを救う」の功が完  
了しても、度他「他を救う」は休まない、という仏教の  
提唱はまさに世間法と補い合う関係にあり、虚無寂滅の

談議では決してない、と説いた。このことから、楊文会  
は敬虔な仏教信者であったことがわかる。しかし  
ながら彼はそれ以上に、仏法の深義を嚴肅かつ眞面目に  
研究した仏教学者であった。「私はただ人に仏教を学ぶ  
ように勧めるだけで、出家を勧めはしない。なぜなら、  
出家者は多いけれども、仏教の学徒はたいへん少ないので  
ある。しかも師に投するというのを一番むずかしい。  
知人で師にとられた者がいたが、それなら在家で自由  
にしていられる方がよい」（『与桂伯華書』、『雜錄』卷六）  
と語っている。このように仏学研究を重視したがために、  
彼の五十年間にわたった仏学研究の生活は、近代仏教文  
化の振興、仏教典籍の整理・刊行、學術界における仏教  
文化研究の推進、仏学研究の人材養成などの面すべてに  
わたって重要な貢献をもたらしたのであり、高く評価せ  
られるべきものである。

#### 原註

（1） 彭紹升（一七四〇—一七九六）の字は允初、号は尺木、  
『文錄』十卷・『詩錄』四卷・『二錄』二卷・『三錄』三卷に  
編集されており、『汪子遺書』と総称する。

（4） 袁自珍（一七九二—一八四一）の字は璵人、号は定庵、  
浙江省仁和（今の杭州）の人。十九世紀前半の有名な詩  
人、政治家、進歩的思想家。仏学では彭紹升の影響をか  
なり受けており、『知婦子讚』では彭紹升を「中国の仏  
學者で、わが知婦子ほど万全な者はいなかつた」と讃え  
ている（『袁自珍全集』）。

（5） 魏源（一七九四—一八五七）の字は默生、湖南省邵陽  
の人。十九世紀前半、袁自珍と並び称せられた著名な學  
者、進歩的思想家。仏学では淨土法門を尊び、『淨土四  
經』等を編纂・刊行した。楊文会は『重刊淨土四經跋』  
で、「魏公の經世の學は周知のところだが、実はその本源  
の心地は淨業が円満成就していく、その体の方から用を  
起しているのだ」（『雜錄』卷三）と述べている。

（6） 楊文会の『大藏轉要叙例』には、「この書は専ら初學  
者のために編纂し、分類して検索の便宜をはかった。凡  
ての心地は淨業が円満成就していく、その体の方から用を  
起していけるのだ」とある。そのあとに以下の分類を列挙する。  
華嚴部・方等部・淨土部・法相部・般若部・法華部・涅  
槃部・小乘經・密部・大乘律・小乘律・大乘論・小乘  
聞居士集』八巻に編集された。

（3） 汪縉（一七二四—一七九二）の字は大紳、号は愛廬居  
士、江蘇省吳縣の人。程・朱・陸・王の分け隔てを打破  
譲・旁通・導俗。

(14) 「祇桓精舎」の創立について、楊文会は「眾式海に与える書」に以下のように記す。「今春、同志諸君は、インドの仏教に振興の機運があり、あちらでは中華の名徳による奨励を得たいと望んでいることを知った。だが言語・文字の問題がある。仏道に明るい者はすでに年老いており外国語習得は困難で、若い者は經義を通じておらず、無駄足踏みで無益だということになる。そこで祇桓精舎を創設して人材養成の基礎としようということにな

華嚴宗関係では、晋訳『華嚴經』、智儼『華嚴經孔目章』、澄觀『華嚴經疏鈔』・『華嚴經懸談』、李通玄『華嚴經合論』等を校勘・出版したほか、「華嚴著述集要」(法藏の多くの重要な著述等、計二十九種を含む)を編集し、また、「世の華嚴学者」の「圭臬「よりどころ」」として、『賢首法集』(法藏の著作二十二種を含む)の編集を企画した(「賢首法集叙」「雜錄」卷三)。

楊文会は『成唯識論述記』刊行の叙文で、「この書は「元末より伝を失い、五百年來、誰も目にすることができるず、好学の士がつねに遺憾とした」ものだと記している。確かにこの書は明・清大藏にはともに欠落しており、そのため、当時の人たちは国内にはもうないものとと考えた。

(12) 楊文会は「支那仏教振興策」で穀氏学堂の開設を提倡、「安樂集」、唐の窓基「西方要訣」、唐の元曉「遊心安樂道」、唐の迦才「淨土論」、唐の懷感「淨土群疑論」。  
(13) 楊文会は「支那仏教振興策」で穀氏学堂の開設を提倡、「内「仏教」外「仏教外」の学の二班に分け、「外学班は一般の学問を主にして、同時に仏書講読と教義の講解とが半半の仏学をも学び」「内学班は仏学を主とし、インド古代の五明「声明・工巧明・医方明・因明・内明」の学のように一般学をも兼習する」(『雑錄』卷一)、としている。

(7) 多くの困難のうち、主要なものは經濟上のそれであつた。楊文会は金陵刻經處を維持するため、二度のヨーロッパ視察から持ち帰つた各種の儀器「科学・地理・土木等の關係の器具」をすつかり湖南時務学堂に売り渡した。

しかし、一九三三年に越城広勝寺の金蔵が発見され、その中に『成唯識論述記』(七巻が残る)や龕基のその他著作多數もあり、のちにそのすべての影印が『宋藏遺珍』に収められた。

「祇桓精舍」の創立について、楊文会は「衆式海に与える書」に以下のように記す。「今春、同志諸君は、インドの仏教に振興の機運があり、あちらでは中華の名徳による援助を得たいと望んでいることを知った。だが言語・文字の問題がある。仏道に明るい者はすでに年老いており外国語習得は困難で、若い者は經義を通じておらず、無駄足踏みで無益だということになる。そこで祇桓精舎を創設して人材養成の基礎としよう」ということにな

(15) 蘇曼殊（一八八四—一九一八）は一九〇八年の「劉三に与える書」でこう記す。「楊仁山長老の命により、十三日の晩、南京にやって来ました。……こちらの校務はすべてうまく運びました。現在 鎮江・揚州の大刹から僧侶を選んでいるところで、来月のはじめには開講ができると思います。漢文の教師は李曉歐先生、経學は仁老だとのことです。二、三年後、精進できた僧がいれば日本やインドに派遣し、留学してサン스크リット文を学ばせようと思います。それで仏教の再興を期待できるやもしれません」（柳亞子・柳無忌編『曼殊全集』）。

(16) 太虛（一八八九—一九四七）は民国期の著名な僧で、仏教改革や仏化運動を鼓舞した。彼が創刊した仏教雑誌『海潮音』は長く続ぎ、広範な影響力をもつた。彼の著作は多彩多數。一九二八年から、武昌仏学院・閩南仏学院・漢藏教理院等を前後して創設し、多くの著名な学僧を作養成した。なかでも印順・法尊・巨賛・大醒・塵空らは、国内外でかなりの影響力をもつた。

(17) 欧陽漸（一八七一—一九四三）は字を覲無という。楊文会の死後、陳鏡清・陳義らとともに金陵刻經處の運営権を託された。一九二二年に支那内学院を創め、多數の仏

- (18) 南条文雄（一八四九—一九二七）は日本近代の著名な仏教学者、「淨土真宗大谷派」で、主著に『大明三藏聖教目録』・『校訂梵文法華經』等がある。楊文会はまず上海で日本の僧松本白華と交つて南条文雄・笠原研寿らがロンドンに滞在中であることを知り、のちにロンドンの末松謙澄のところで南条文雄らがオックスフォード大学でサンスクリットを学んでいることを知つて、挨拶状を出した。間もなく、楊文会は末松の寓所で南条文雄と会い、連夜歓談し、厚い友情を結んだ。勘案するに、中国佛教協会編『中国佛教二』三一三頁には、楊氏は「光緒十二年（一八八六）に再度ロンドンに行き、日本の留学僧南条文雄と知りあつた」とあるが、これは間違いである。南条は一八七六年からイギリスに留学し、九年間滞在して一八八五年に帰国した。楊文会が二度目に渡欧した時、南条はすでにロンドンにはいなかつた。楊文会は二度目の渡欧を前にして南条に手紙を出し、「のちに松江君が送つてくれた貴方のお手紙二通を受けとり、……拝読していくよいようれしくなりましたが、お手紙ではじめ
- (19) 楊文会『集刻古逸淨土十書錄起』に「近年世界が往来し、私もヨーロッパを歴遊することができるようになり、イギリスで南条上人と出会つた。上人は文雄という名で、浄土宗の傑士である。それぞれ帰國すると、たまたま父蘇君を通じて南条に釈典の物色を頼み、中華の古徳の逸書はすべて購入してもらい、それは合計三百余種にのぼつた」（『雜錄』卷三）とある。南条文雄の『大日本統藏經序』に「明治二十四年（一八九一）以後、余が道友とはかって『楊文会』居士に贈ることにした和漢仏典は二百八十三部」とあり、さらに楊文会の「南条文雄に与えた書十九」には「近年来、購入をお願いした古くは梁隋から唐・宋までの經籍千余冊ならびに貴國の著述が書架いっぱいにすらりと並びました。まことに千載一遇です。貴殿および東海君の御尽力がなければ、どうしてこれほど広範にわたつて法寶を收集することができたでしょうか」（『雜錄』卷八）とある。
- (20) 楊文会のこの『敍』は『等不等鏡雜錄』卷三に收める

が、『大日本統藏經』には入っていない。

(21) 『論語発隱』に見える。「仁」とは第七識「末那識」の我執、「礼」とは平等性智、「仁」とは、性淨本覺である。第七識を平等性智に転ずれば、天下はすべて平等となつて性淨本覺に帰する。といふのも一切衆生は仁の体をみずから完備しており、ただ第七識、染汚意「第七識の異名」が俱生分別我執を起すために、無障礙のうちにさまざまな障礙を要見るのである。もし我執を破り、みずから平等の礼を回復すれば、天下の人みな同じく「仁」であるとわかる。これが『仁を為すは』「仁に由つて』人に由らない所以なのである。

(22) たとえば『莊子』「人間世」篇で孔子と顏回の「心斎」についての議論、「大宗師」篇で孔子と顏回の「坐忘」についての議論を記述している。

(23) 楊文会はじめ李通玄の『華嚴經合論』等から華嚴教義を崇めるようになり、それ以後、澄觀（清涼）の著述を読んで非常に敬服し、最後に法藏（賢首）の各種の論疏を読むに至つてはじめて、華嚴の教旨は法藏が基礎を作ったものであると知り、そこで専ら賢首を崇めるようになった。

(24) 『大乘起信論』の真偽問題については、中日両国において学者の間で大論争があるが、楊文会はそれが馬鳴作であることを少しも疑つていなかつた。

(25) 楊文会が『大乘起信論』を讀える記述は、以下にみる

学研究者を養成した。そのうち著名な者に、湯用彤・呂激・劉定權・王恩洋・黃櫞華らがいる。支那内学院も多くの仏典を校勘・刊行し、なかでも、その編纂にかかる『藏要』三編は合計七十余種の重要な經律律を収録しており、以下のところ、校勘が最も精密な版本に數えられる。

(18) 南条文雄（一八四九—一九二七）は日本近代の著名な仏教學者、「淨土真宗大谷派」で、主著に『大明三藏聖教目録』・『校訂梵文法華經』等がある。楊文会はまず上海で日本の僧松本白華と交つて南条文雄・笠原研寿らがロンドンに滞在中であることを知り、のちにロンドンの末松謙澄のところで南条文雄らがオックスフォード大学でサンスクリットを学んでいることを知つて、挨拶状を出した。間もなく、楊文会は末松の寓所で南条文雄と会い、連夜歓談し、厚い友情を結んだ。勘案するに、中国佛教協会編『中國佛教二』三一三頁には、楊氏は「光緒十二年（一八八六）に再度ロンドンに行き、日本の留学僧南条文雄と知りあつた」とあるが、これは間違いである。南条は一八七六年からイギリスに留学し、九年間滞在して一八八五年に帰国した。楊文会が二度目に渡欧した時、南条はすでにロンドンにはいなかつた。楊文会は二度目の渡欧を前にして南条に手紙を出し、「のちに松江君が送つてくれた貴方のお手紙二通を受けとり、……拝読していくよいようれしくなりましたが、お手紙ではじめ

ように多見される。「大藏教典は巻帙大量にあるが、その要点真髓を追求したものでは、『起信論』以上のものはない。この論の注釈者は隋唐以来、さうと十家を数える。それぞれ長所があるとはいえ、賢首の右に出るものはない」（『會刻古本起信論義記錄起』・『雜錄』卷三）。『起信論』は馬鳴菩薩の作で、馬鳴は禪宗十二祖である。この論は宗教の円融であり、仏學の要典である（『答駁德高質疑十八問』・『雜錄』卷四）。「もし仏教に通じようとするなら、『起信論』が最高で、『起信論』に通じてから『楞嚴』を読むのである。この經と論とは簡要で、初学者に便利である」（『答廖廸心偈』・『雜錄』卷四）。「どうか『大乘起信論』を讀誦して精通して下さい。そうすればおのずと眞実の仏法の徹底した理解がえられ、空を摩で影を捉えようとして時間を無駄にするようなことはなりません」（『答廖廸心偈』・『雜錄』卷五）。「私はいつも『大乘起信論』を師としています。わずか一万余字といたします。この論に通すれば、『楞嚴』・『楞伽』・『華嚴』・『法華』等の經はおのずとわかりやすくなります」（『答李濟深書』・『雜錄』卷六）。「さらに『大乘起信論』を入道の門とします。この論に通すれば、『楞嚴』・『楞伽』・『華嚴』・『法華』等の經はおのずとわかりやすくなります」（『答李濟深書』・『雜錄』卷七）。ちなみに『大乘起信論』を入道の門とするのは、なんといっても『大乘起信論』です。熟読深思すれば、きっと仏教の本末に通ずることができます。

めで貴方の御帰國を知り、……私は劉星使のお呼びでいましたが、またイギリスへ行つて仕事をしなければならなくなりました」云々と記しているのもその証拠となる（『與日本南条文雄書五』・『雜錄』卷七）。ちなみに南条文雄の『機旧錄』（平凡社東洋文庫等に収録）にも楊文会との交友の記述がある。

……ひとたびこの論に通すれば、一切の経に門径が開かれよう」（『与呂勉夫書』同上）。「仏法の深義を明らかにしようとするなら、『起信論』を研究すべきである」（『与黎端甫書』同上）、等等。

(26) 楊文会の『仏教初學課本註』にこうある。「仏法を学者はまず信じ、信じてから理解し「知識を得る」、理解してから行「実踐」を修め、解、行から証悟に至る」として、自注に「信・解・行・証の四門の次第は『起信論』に出ており、賢首はこれを根本として『華嚴經』を解釈した。これは古今不変の法なのである」と。

(27) 楊文会の『大宗地玄文本論略註序説』に詳しい。それには、「『大宗地玄文本論』では金剛五位を建立している。衆生は無量劫來、業の招く果が相続し、三僧祇「菩薩が仏果を得るまでの修行の年時」の修証の功でなくしては除き尽すことができないので、無超次第漸転位を立てる。衆生が一念相應すれば諸仏と同じになるので、無余究竟総持位を立てる。衆生心は法界を含み、あまねく融合して尽きることがないので、周徧円満広大位を立てる。衆生は刹那刹那に有に執着し、解脱門に違うので、一切諸法俱非位を立てる。衆生は有を棄て、空に執着して断滅に向かうので、一切諸法俱是位を立てる」とある。

(28) 楊文会は『成唯識論述記叙』でこう説く。「性相の二宗は異なるものか、異なりはしないのである。性宗は直下に空を明らかにし、空が極地に至れば真性がおのずと

顯現する。相宗はまず我法を打破し、それから圓実を明らかにするのであり、無所得「無分別・無執着」を究竟とみなす。そこで、有とか空に執着して相対立するのはいずれも門外漢であることがわかる」（『雜錄』卷三）。

(29) 楊文会は『眾幻人与える書』でこう述べる。「禪宗の一門は人心を直指し、見性成仏する。教外別伝とはいうものの、実は般若法門であることが〔禪宗〕五祖・六祖の語を見ればわかる。禪宗がただ直下に見性するのを待つのみで、成仏するかどうかは問わない所以である。……禪人の見性には深浅に大差があり、晚唐以後、利根化が起きるようなものは、同じ次元では語れない」（『雜錄』卷五）。

（30）『華嚴經』（四十巻本）末の「入不思議解脱境界普賢行願品」に普賢菩薩が諸菩薩および善財に告げたこととして以下の話を載せる。「善男子よ、もし此の功德を成就せんと欲するなら、當に十種広大行願を修すべし、……またある人、深信心を以てこの大願を受持し、誦誦し、一つの四句偈を書写するに至ることすらあり、速かによく五無間業を除滅し、……又、この人、命終る時に臨んで最後の刹那に一切諸根を悉くみな壊わし、一切の親属を悉くみな捨離し、一切の威勢を悉くみな失す。……ただこの願王のみは捨離せず、一切時において前に引導し、一刹那のうちに即ち極樂世界に往生することを得、到れば即ち阿弥陀仏・普賢菩薩・觀自在菩薩・彌勒菩薩等に見ゆ」（『大正藏』十卷）。また、『大乘起信論』第四分の末にはこうある。「復次に、衆生初めて是の法を學して正信を欲求するに、其の心怯弱にして、……懼れて信心は成就すべきこと難いと謂い、意に退せんと欲する者は、當に知るべし、如來に勝方便有り、信心を護護した

と。さらに『仏教初學課本註』で「禪と教とは別物ではない」とした上で、「三界唯心と方法唯識とを並説して宗教を融合する」と自注している。

(31) 楊文会は『眾幻人与える書』でもこう述べている。「私は仏法を聞きはじめたころはただ宗乘のみを尊んで、淨土の經論には意を介さず、仏相の莊嚴に執着するのは了義の説ではないと考えた。雲棲（株左）の諸書を読んでみると與義を明らかにしてあり、はじめて淨土門はあまねく群機を容れ、末法に廣く流布するもので、實に苦海の鬼航船、入道の階梯であると知った」（『雜錄』卷三）。

(32) 楊文会は『等不等觀雜錄』に収める多くの書簡・序・跋において淨土理論を論じてゐるほか、『觀無量壽佛經略論』・『無量壽經優婆提舍願生偈（往生論）略解』・『壇經略解』（「身中淨土」の一節の專訳）の専著や日本淨土真宗の教義を論評した『闡教編』等がある。

(33) 楊文会は『李漁縁に与える書』でもこの説を展開している。李漁縁が「将来、諸仏が娑婆を淨土に転する際」

という言い方をしたのに對し、「見道がまだ浅いからそう考えるのだ」とさとす。「娑婆とは衆生の素業が感ずるもの、ちょうど空華のようなもので、もともと実体はない、と知るべきである。淨法界においては極樂も娑婆もともにありえない。だが弥陀は鏡や水が花月をうつすように大願力で極樂国土を顯現し、衆生を攝受し、入れば遅くことのないようにする。もし質疑「物質」心で求めようとするなら、道から遠く離れてしまふ。娑婆世界は衆生の大悲心が化した境であり、一切の菩薩が種種の難行苦行を修めるのはみなこの世界においてある。

菩薩が空三昧に入れば世界は尽きてしまふし、幻三昧に入れば世界が示現するのである。これは空有無礙・一念全收ということで、將來の轉移を待つことはない』『雜錄』卷六)、と。

(34) 楊文会は宋の延寿が「禪宗を提倡し、淨土に歸したのは、ことに古今に類をみない」としきりに讀えており(「般若波羅密多會演說」・『雜錄』卷一)、彼の禪淨融合説には依拠するところがあるのがわかる。融合説はほかでも説いており、『壇經』(宋寶本系)の「身中の淨土」の一節を特にとりあげた「略說」では、こう述べる。「一途に理でもって事を奪うのは、事で理を顯すこととまさしく相反する。淨土の人は罪を犯さないから精神は微妙の境地にある。華嚴の玄に入り、東土・西土を超えきっているのに、どうして罪を犯そうとするだろうか。もし

て淨域に攝め帰するのであって、業力にからまれ、牽かれるることは決してない。世にいう帶業往生とは、俗情に隨う言にすぎない。実は善惡や因果はみな空花(幻花)のようなもので、もともと花などないのによじらせた目が幻覚するのだ。死人がどうして業の体相をもって淨土に往生するということがあるうか」。

(37) 楊文会は「淨土の縁は蓮池によつた」とみずから語つており、明代の名僧株宏をいたく敬まつた。株宏撰『阿彌陀疏鈔』を評して「賢首の家法を用ひ、「念佛」の事によることがあれば理によることもあり、機に投合して説を正している」(『仏學書目表』・『雜錄』卷二)、と述べている。したがつて、楊文会が華嚴の教理を淨土觀法に融合させたのは、多分、株宏の影響を受けたのである。

(38) 『觀無量壽佛經略論』に説く。「この位の行人には、入觀と同時に娑婆に極樂が現れ、出觀とともに極樂に娑婆が現れる。娑婆と極樂とは相即相入し、無礙無雜で、華嚴の十玄門にあてはめれば、事事無礙法界にほかならない」。

(39) 魏源編『淨土四經』はまさしく「普賢行願品」(すなわち八十『華嚴經』の末「入法界品」)を三經と合刊したもの。楊文会は『淨土四經』を重刻する跋文で、魏源がこれを編集したので「世の淨業を学ぶ者は本書を習得するだけで事たりるようになつた」(『雜錄』卷三)、と

記す。

(40) 明の真界注『大乘記信論纂註』、明の德清注『大乘起信論直解』・唐の法藏『大藏起信論義記』を指す。楊文会は『仏學書目表』で、『義記』について「法藏が注解を作つてその妙義を詳述し尽してゐる。熟読深思すれば、學徒はおのずと三藏教海に通ずることができると評し、『纂註』は「賢首の『疏』と長水(子璿)の『筆削記』を主にして簡略化し、編集したもので、初学者に便利である」とし、『直解』は「仏法の真理を直接に論じ、禪門の機に契合する」として、「以上の二種の『纂註』と『直解』」は『義記』への案内書としうる」と評している。

(41) 「李潛諱に与える書」において、念佛法門は三經一論を手引きとするのがよいとしたあとに続けて説く。「さらに『大乘起信論』を入道の門とします。この論に通すれば、『楞嚴』・『楞伽』・『華嚴』・『法華』等の經はおのずとわかりやすくなります。というのも、弥陀の因地「仏果を得る前の位」の修行はこの道にほかならず、西方に往生した人が彼土で修行するのもこの道にほかならないからで、これを師資「師匠と弟子」道合といい、人品はきっと高められます」(『雜錄』卷六)。

(42) 楊文会と日本の淨土真宗僧との論争の主要な資料は、のちに『國教編』一巻に編集された。そのほかに書簡の一部にもいくらか関連資料がある。『國教編』には、「闡教芻言」・「評『真宗教』」・「評『選択本願念佛集』」・

人が念佛心で無生忍「空の智」に入ることができたなら、六祖は厳しくとも必ずや罵りきれないはずである」と。さらに、『重刊淨土四經跋』では証自性弥陀をも肯定している。「世間の仏乗を修める者たる、淨土とてあなどらぬよう伏して願いたい。念佛門を信すれば、わが仏世尊は別に方便として群生をあまねく救う法を開かれる。もしその深遠微妙な義がわからないのなら、それでも信心をしつかりもつて修行に励むとおのずと開悟の期があられる。その義がわかる者はまさに一心に廻向し、万行を円修し、五濁を転じて蓮邦とし、弥陀を百姓に託する。これが私の深く望むところである」(『雜錄』卷三)、と。

(35) 『仏教初學課本註』でもこう説く。「千句も万句も一句である。前句はすでに滅し、後句は未生であり、當念の一句が剎那として止まらないでいる。念佛の心は過去を繰ることなく、未來を繰ることなく、ただ現前の一句を繰じて往生の正因とする。これにこそが万修万人去「修めたものは誰でも成仏する」の法である。時間をかけて熟練すれば、縁する心が忽然と脱落し、念することなくして念じ、念ずるものがそのまま無念となる。これを理の一心というのであり、人品はより高められる」と。『仏教初學課本註』で説く。「一切の衆生の本源の性地は十方諸仏と無二無異であり、極惡の業を造つて無量の苦報を受けても本性は汚染されない。一念の廻向で如来は悉知悉見し、同体の大悲「仏・菩薩の大慈悲」でもつ

「評小栗〔栗〕栖『陽駁陰證辨』」・「評小栗〔栗〕栖『念佛通』」および「雜評」を含む。

(43) 「小栗〔栗〕栖『念佛通』」を評す「でもこう指摘する。」「私が淨土門を説くのは退転防止の法としてである。

弥陀願力にすがって西方に往生し、永遠に退転する縁をなくせば、必ず成仏することになる。そこで淨土の専修がそのまま聖道門の田成となりうる。かといって、聖道を捨てるよう唱えるのは淨土を捨てることである。淨土は弥陀が聖道を修めることから成り立っているのであるから」と。また、早い時期に書いた「日本の南条文雄に与える書二」でもすでにこう記している。「宗旨（淨土の宗旨を指す）を提倡するのに聖道を全面否定する必要はなさそうです。世智弁聰『世俗のことにつかしく利巧なこと』の連中は聖道門の研鑽をつんでみないことには、一途に淨土に帰依することはできないからです」

（『雜錄』卷七）、と。

(44) 「日本の南条文雄に与える書二十二」において、「選択本願念仏集」と『真宗教旨』への批判について言及し、以下のように述べている。「私は貴殿とおつきあいして二十年近くになりますが、仏教の宗趣について議論したことはありませんでした。貴宗が全世界に伝教されようといふ折から、如來の教意といさざかも違うことのないよう、伝法の高賢に古今の論をよくよく勘索なさるように心からお願ひしたいのです。そうすれば、淨土真宗は群

生をあまねく救濟し、無量無邊となりましよう」（『雜錄』卷八）、と。

訳註

〔1〕 本稿で引用されている楊文会の著作はすべて『楊仁山居士遺著』（金陵刻經處刊）所収のものであり、日本で通行する台灣版『楊仁山居士遺著』（文海出版社）は一部の絵図の脱落を除いて、その完全な影印本である。ただし、一九八一年の金陵刻經處復刻本には、趙樸初の『重印經書因緣略記』を加える他、台灣本所収とは異なる一九五五年改稿版『楊仁山居士事略』を載せている。ちなみに、同じく八一年、『淨土四經』とともに、魯迅生誕百周年記念として、一九一四年に魯迅が同刻經處に刻経の注文をした『百喻經』をも復刻している。

〔2〕 欧陽漸や叔太虛の思想について論及した研究書に、ウインチット＝チャン（陳榮捷）の『近代中国における宗教の足跡』（福井重雅訳、金花舎）がある。また、抗日戦や文革中の閉鎖期を経て復興に至る金陵刻經處や支那内学院の辿った変遷、ならびに本稿にも名前のある多くの思想家・学者のそれへのかかわりについて、拙稿「譚嗣同の旅（北京・南京・瀏陽をたずねて）」（『新青年』読書会編『猫頭鷹』三号）が当地での取材をはじめて記している。

〔3〕 章炳麟については、楊文会よりむしろ歐陽漸との関係

が深く、「支那内学院縁起」（『中国哲学』第六輯所収）を記したりしている（〔2〕であげた拙稿を参照されたい）。

〔4〕 小栗栖（香頂）——（一八三一一九〇五）、真宗大谷派、豈後妙正寺住職。反キリスト教護法論を唱え、中国へは二度渡り、大谷派上海別院を建てた。著作に『選択集講録』・『北京紀遊』・『真宗教旨』・『念佛通』等がある——のことを『楊仁山居士遺著』ではすべて小栗栖と誤っている。今は出典明記のため、誤記を残しておく。

（さかもと ひろこ）・学習院大学非常勤講師

## 附錄 楼宇烈教授主要編著・論文目録

（編著）

- ・『王弼集校疏』（一九八〇年、中華書局）
- ・『中国佛教思想資料選編』（一・二卷既刊、石峻・方立天・許抗生・梁壽明と共編、一九八一—八三年、中華書局）
- ・『康有為「論語注」』（校点、一九八四年、中華書局）
- ・『論文』
- ・『郭象哲学思想剖析』（『中国哲学』第一輯、一九七九年）
- ・『試論近代中國資產階級改良派的哲学思想』（『歷史論叢』第一輯、一九八〇年）
- ・『葉適』（評伝）（『中国古代著名哲学家評伝統編三』、一九八二年）
- ・『莫若以明』（評）（『中国哲学』第七輯、一九八二年）
- ・『開展对中国文化總体上的綜合研究』（『中国文化』研究集